

語義の拡大

児 玉 徳 美

1. はじめに：意味のひろがり

人は現実世界に接し、さまざまな思いをいだく。その思いは知覚・思考・感情・知見・意図・信念体系などからなり、人に伝達しようとする際、通例語を連ねて表示される。言語記号による表示では意味する語と意味される世界との関係が問われる。

世界が広範な領域からなるだけに、人の思いを表示する語も広い領域に及び、語の意味である語義は柔軟性をもち、しばしばあいまいにもなってくる。例えば五感による知覚の表示をとりあげてみよう。太陽を何色で描くか、虹を6色に描くか7色に描くかは社会・文化や個人によって異なる。トマトも炎もサルのお尻も「赤い」といわれ、redには紫がかかった crimson (濃赤色) から明るい scarlet (緋色) や pink (ピンク色) に近いものも含まれる。「大きいノミ」(big flea) と「大きいゾウ」(big elephant) や「大きい塔」(big tower) では同じ「大きい」といっても大きさに違いがある。odd numbers (奇数) にあいまいさはないが、many people (多くの人々) は50人にも1000人にもいえる。多くの語義は本来柔軟性をもち、文脈によってその意味が明確になっていく。

歴史的にみたととき、ことばは社会・文化の変化に応じて変わっていく。人間の思考や感情が複雑になるにつれて、新しく生まれる制度や組織あるいは思想を表現するために新しい語や語義が必要になる。語や語義の中には廃れて用いられなくなるものもあるが、新たに加わるもののほうがはるかに多い。時の経過とともに語数や語義は増大している。ヒトが進化の過程でいつ頃から言語を習得するようになったか定かでないが、文字の記録が残る有史以後の歴史においては文字やことばについていくつかの分析がなされている。

白川 (1984, 1987, 1996) は三部作の『字統』『字訓』『字通』の中で漢字の歴史を余すところなく解き明かした。漢字が成立した甲骨文や金文から字形学的研究を展開し、漢字の字源や語源を明らかにするとともに、中国や日本で用いられる熟語を含む漢字の用法や意味の変遷を追跡した。白川 (2002) によると、「漢字が成立したのは、まだ神話的な世界観が人びとを支配していた時期」(p68) であり、文字は「王の神聖性に奉仕すべき」(p37) ものとして、「文字は呪能をそこに定着するものであり、書かれた文字は呪能をもつものとされた」(p33)。文字呪能は呪うとは限らない。祝うこと、願うこと、意図すること、それらを文字の力に託そうとするものであった。

白川とほぼ同じ時期に Jaynes (1976) はヨーロッパの言語を対象に、文字が人の意識に及ぼした影響を論じている。Jaynes によると、古代社会の人間にとっては全知全能の神の声こそが意志であり、人間は右脳に囁かれる神々の声に従うのみであったが、今から3000年ほど前、文字が盛んになった頃、左脳に人間の意識が芽生えてきた。その後、人間が文字と意識を得たのと引き換えに、いつの間にか神々の声は消え、神々は沈黙したという。ここでは意識の誕生は生物的進化によるものではなく、むしろ文字に基づいて学習されたものとみている。

白川と Jaynes は対象とする文字がアジアとヨーロッパに分かれるが、ほぼ同じ時期の古代社会に成立した文字が神の声を伝えるものであったとし、やがてその後の人間の意識に変化をもたらし、ことばや社会を変えていったとする点で一致している。21世紀にも文字をもたない「未開」種族がわずかにアフリカや南米の奥地に見られるが、そこでは白川や Jaynes が指摘するように、呪能や神託が生活の中心にすわっている。確かに文字はそれぞれの時代の記録を次の時代に伝え、後世の社会に大きな影響を及ぼしてきた。しかし社会の動向に影響を与えたのは文字やことばだけではない。そのことは同じ印欧祖語に由来するインド・ヨーロッパ諸国がそれぞれ異なる歴史を歩んできたことをみれば明らかである。何千年も経過するなかでかつての表意文字も表音文字化したり、文字によって表される語義も忘れられていく。字源や語源はときに語の用法や意味を表すことがあるにしても、長い歴史をもつ語の場合、後世の用法や意味と無関係である。

現代の言語使用者にとっては言語記号として用いられる文字や語義の現代の用法のみが意味を有している。語源について考えてみよう。例えば英語の sole は「足の裏」と「シタヒラメ」の語義をもち、まったく別の語の感じがするが、いずれもラテン語の sola 'sandal' に由来し、フランス語を介して異なる時期に英語に入ったものである。また science (科学) と shit (大便) はともに「切る (cut)」を意味する印欧祖語の skei- に由来する。こうした語源を知ったとしても、今日の用法や意味が歴史から学べるわけではない。もう少し新しい例ではラテン語からフランス語を経由してきた gay がなぜ「華やかな」と「同性愛の」の意味に用いられるのか、OK の由来に諸説があるが、決定的な答えはまだ見つかっていない。このような問題はあがあるが、人はいちいちその歴史を詮索することはない。語の現代の用法や意味は、遠くその起源に由来するにしても、現実の言語活動は比較的新しい living memory (生きている人たちの記憶) 内の 50 年から 100 年ほどの知識を基礎にしている。

冒頭で太陽や虹を何色で表すかは社会や個人により異なり、red といってもその赤の中身には幅があると述べた。同じように例えば「頭のはげた男性」という場合、その人は昔からはげていたわけではない。髪の毛が抜けた結果である。最後に何本目の髪が抜けて「はげ」と呼べるかその境目が決まっているわけではない。現実世界の多くのものは連続体をなし、判然と分別しにくく、一見あいまいな面をもっている。しかしここで忘れてならないことは、かつて Russel (1923) が指摘したように、あいまいなのは現実世界を表示することばであり、ことばによって表示される現実世界ではない。世界はあいまいとか正確とかと無関係であり、あるがままの姿で存在している。語やことばにあいまいさが生じるのは、第1に、無限に広がる世界を有限の記号を用いて分別しようとするためであり、第2に、話し手が自らの視点で特定の側面に焦点を当てて世界を表示せざるをえないためである。いずれも言語記号が固有にもつ限界からきている。見方を変えれば、記号にこのようなあいまいさがあるからこそ、人間は言語を駆使できる。人間には現実世界のあるがままの姿をあるがままに正確に記述し、それを記憶判読するような能力は備わっていない。

ことばのあいまいさとは同じ語・句・文・言説が2つ以上の異なる意味解釈をもつことをいう。ことばが意味上どのような広がりともつまいさをもつかについて具体例を若干みてみよう。

- (1) a. 太郎は頭が大きい。 [首の上の部分]
- b. 太郎は頭がいい。 [頭の働き]
- c. 太郎は頭を刈った。 [頭髪]
- d. 太郎はその証拠を頭から否定した。 [初め]
- (2) a. 太郎はハシを渡った。 [橋]

- b. 太郎は食事でハシを使えるようになった。[箸]
 c. 太郎は道のハシに寄った。[端]
- (3) a. We managed to get to the bank just in time.
 (川岸／銀行にちょうど間に合うように着くことができた。)
 b. We moored the boat to the bank.
 (川岸にボートをつないだ。)
 c. He is the manager of a local bank.
 (彼は地方銀行の支店長である。)
- (4) a. (身体の) 頭 (head) vs 足 (foot)
 b. (ベッドの) 頭部 (head) vs 足部 (foot)
 c. (ピンの) 頭部 (head) vs 先 (point/*foot)
 d. (テーブルの) 表面 (top/*head) vs 脚 (foot)
 e. (山の) 頂上 (top/head) vs ふもと (foot)
 f. (木の) 梢 (crown/*head) vs 根元 (foot)

(1a-d) の「頭」は多様な意味に用いられ、文脈によって文末尾に示した意味になり、(2a-c) では同じ「ハシ」が文脈によって異なる意味をもつ。(3a) の bank は「銀行」か「川岸、土手」かであいまいであるが、(3b, c) では現実世界の知識から共起語との関連で意味が明確になる。(4a) は身体を表す「頭」(head) と「足」(foot) が比喩的にどのように表現されるかを比較したものである。(4b-f) では日英語が1対1で対応しているわけではなく、また頭 (head) と足 (foot) が比喩の反意語として常に対応するわけでもない。

語数や語義が拡大し、ことばのあいまいさが増大する中で次のような疑問が出てくる。語は本来多様な意味をもつとはいえ、あいまいな意味にはどのような種類があるのか、語義の拡大にはどのような法則が働いているのか、語義 (のあいまいさ) の違いはどのように判別されるのか、語義の拡大や意味表示の違いは諸言語でどのような異同があるのか、辞書における語義の規定はどうあるべきか、ことばの生成理解はどのような仕組みでなりたっているのか、このような疑問に答えるのが本論の目的である。

2. あいまいな語義

これまで語の意味である語義の拡大とともに、語義のあいまいさについて述べてきたが、ここには大きく2つの問題がある。1つは「語」とは何をさしているのかであり、あと1つは「あいまいさ」にどのような種類があるのかである。

まず第1の問題からみてみよう。例えば obey, obeys, obeyed, obeying などはクロスワード・パズルで用いられるようにそれぞれ別の語 (word or word form) とみなされる。これが日常的に使う「語」である。しかしこれらの語は obey が屈折変化したもので基本的にはほぼ同じ意味を表し、意味上 obey という1つの語 (lexeme) に属するとみなすこともできる。以下、本論では語を通例後者の意味に用いる。そこで同じ接辞でも屈折接辞でなく派生接辞のついた obedience, disobey などは派生接辞が意味を変えるためそれぞれ obey とは別の語 (lexeme) とみなす。

obey などには自動詞と他動詞があるが、いずれも同じ語とみなす。ただし同じ形態で品詞が異なる

る場合は別である。特に英語においては品詞の転換が大幅に行なわれる。例えば love は名詞と動詞、open は動詞・形容詞・名詞の用いられる。各品詞には意味上共通する部分もあり、同じ1つの語に属するとみなしたい感じもあるが、品詞の違いは派生接辞のつく語と同様に意味の違いにつながり、それぞれ別の語に属することにする。そこで obey の自動詞と他動詞はクロスワード・パズルにおけると同じように1語になるが、複数の品詞に用いられる love (名詞・動詞) や open (動詞・形容詞・名詞) はクロスワード・パズルでの数え方と違ってそれぞれ2語と3語になる。なお同じ語形でも語源が異なり共通した意味をもたない (2a-c) の「ハシ」などもそれぞれ異なる語となる。ここでの「語」(lexeme) はあくまで意味上のものであり、put up with (〜にがまんする)、kick the bucket (死ぬ) のような慣用句は複数の words からなるが、全体で1つの意味を表すため、それぞれ1つの語とみなされる。

次に第2の問題に移る。「あいまいさ」にはどのような種類があるのでしょうか。大きく同音異義 (homonymy) と多義的あいまいさ (polysemy or ambiguity) と未分化あいまいさ (vagueness) に分かれる。同音異義語は次例のように、同じ発音ながら語源を異にし、その意味は互いに通例無関係なものである。

(5) a. write, right, rite / ring, wring / not, knot

b. bear の「クマ」と「耐える」/ bat の「(野球などの) バット」と「コウモリ」/ found の「設立する」と find の過去・過去分詞形

意味が互いに無関係であるとはいえ、同じ発音で異なる意味を有している点であいまいであり、文脈によって意味の選択を迫られる。先にあげた (2a-c) や (3a-c) はここに属する。

多義的あいまい語と未分化あいまい語は、いずれも同じ語源から派生し、互いに関連した意味を有する。前者は1つまたは複数の語に属し、後者は1つの語に属する。

(6) a. fair : (判断が) 公正な (反: unfair) / (天候が) よい (反: cloudy) / (皮膚が) 色白の (反: dark)

b. John hit the wall. (ジョンが壁をぶった。/ ジョンが壁にぶかった。)

c. Is that dog a dog or a bitch? (その犬はオスですかメスですか。)

c'. ?Is that lion a lion or a lioness? (そのライオンはオスですかメスですか。)

d. Flying planes can be dangerous. [飛行機を飛ばすこと / 飛んでいる飛行機]

e. He shot the man with a gun. [銃で (撃つ) / 銃を持った (男)]

f. We heard her cry for help. [叫ぶ / 叫び]

f. We heard him cry for help. [叫ぶ]

(7) a. kick the ball (ボールをける: 「ける」のが右足か左足か不明)

b. cousin (いとこ: 男か女か不明)

c. love (愛: romantic [parental, brotherly] love などのいずれの愛か不明)

d. house (家: John's house burned. [建物としての家] vs We stayed overnight at John's house. [家の中] vs John painted the house white. [家の外側])

e. 犬が太郎にはえた。[特定の] vs 犬は忠実な動物である。[総称的]

f. The [*A] box was a container. [特定の] vs The [A] box is a container. [総称的]

(6) は多義的あいまい語、(7) は未分化あいまい語の例である。(6a) の fair のあいまいさは多義的であり、語義によって反意語も異なる。(6b) の hit はその行為が意図的なものか偶然によるものか

が異なる。その違いは hit の前に副詞の *deliberately* (故意に) と *accidentally* (偶然) のいずれを許すかによっても証明される。(6c) はやや奇妙な文であるが容認される (Lyons 1977a:308 参照)。dog には一般語としての「犬」と「オス犬」の多義的あいまいさがある。多義的あいまい語としてオス・メスの一方と両性を示す一般語として用いられる動物の類例に *lion, cow, hen* などがある。しかし同一文内において一般語としてもオス・メスの意味でも対等に用いられるか否かについては語によって微妙な違いがみられる。(6c') がやや不自然であるのは、*lion* などは dog に比べて一般語としての意味がやや弱いためである。*man* も「人」にも「男」にも用いられるが、一般語としての意味は今日では *lion, cow* などよりさらに弱いと考えられる。その結果、**That man is a woman.* は明確に不適格となる。(6d-f) には用例末尾の [] 内のあいまいさがある。(6f) に似た (6f) は *cry* が動詞としての読みのみが可能であり、あいまいさはない。(6a-c) のあいまいさは 1 語の意味に由来するもので語彙的多義、(6d-f) は (しばしば 2 語に由来し) 統語的役割が異なる文法的多義と呼ばれることもある。先ほど「多義的あいまいさ」の英語として *polysemy* と *ambiguity* をあげたが、通例前者は語源との関連で語に用い、後者は意味上のあいまいさとの関連で語・句・文に用いる。語彙的多義か文法的多義かは語だけでなく句の意味上のあいまいさを問題にしており、正確には *ambiguity* の問題である。なお多義的あいまいさと同音異義を区別する基準は不明瞭であり、人によっては (6d-f) を同音異義 (構文) とするものもある。これは何をもって 1 語とみなすか 2 語とみなすかの基準そのものが不明確なことにもよる。

(7a-f) は末尾のカッコ内に示したように、それぞれ 1 語で 1 つの意味を表すものである。その意味に内包される概念を特定化していないため未分化あいまい語という。(7e, f) では動詞の時制や述部の意味の違いに応じて主語の意味が異なる。つまり時制が過去か現在か、あるいは述部が類全体に言及するか否かにより、主語が特定のか総称的かに変化している。特定のか総称的かの違いは、(6d-f) と同じく語より構文の違いのように見えるが、意味にあいまいさをもたらしている点では (7a-d) とかわらない。しかし人によっては、意味の違いが文の (不) 適格性にも関与することから多義的あいまいとするものもある。§1 であげた例では (1a-c) が未分化あいまい語になるのに対して、(1d) は多義的あいまい語となる。

言語使用者にとって同音異義語・多義的あいまい語・未分化あいまい語の区別はさして重要ではない。理由はこの用語が語源や語義の関連性に基づいて区別されているためである。つまり §1 でみたように、長い歴史の中で語義は変化し、語源と今日の語の用法や意味は必ずしも密接につながっていないためである。日常の言語活動では同音異義語か多義的あいまい語かなど、用語による区別をいちいち詮索したりはしない。同一の発音でありながら異なる意味をもつ語が存在し、その語義を直感的に判別特化しているだけである。言語学にとってより重要なことは、このような語義の拡大や語義の違いがどのような仕掛けで生じ、言語使用者はどのような形で意味を生成理解しているのかを探ることにある。

3. 語義の拡大とその判別

3.1. 比喩とクオリア構造

語義の拡大が言語知識として言語共同体に定着するためには、語義は無原則に拡大するわけではない。語義の拡大には組織だった何らかの体系性が存在するはずである。いったい何が統語的あい

まい語や未分化あいまい語を生み出しているのであろうか。語義は、ある意味を軸に、それと異なるが関連した意味に拡大していく。ここではもとの意味が何であるのか、関連の仕方によどのような体系性があるのかが問われる。本節は多義的あいまい語や未分化あいまい語を生み出す比喩とクオリア構造を扱う。

まず比喩からみていく。比喩は認知プロセスの結果生まれたものであり、比喩によって関連づけられる領域があらかじめ決められているわけではない。ただし多くの場合、認知の基礎として目に見える事物の空間上の位置・移動の知覚を出発点として、その知覚を他の領域に転用拡大することにより多義的あいまい語をつくる。その際、主として次の3種のメカニズムが働いている。

- (8) a. 類似関係に基づく隠喩 (metaphor)
 b. 隣接関係に基づく換喩 (metonymy)
 c. 包摂関係に基づく提喩 (synecdoche)

この3種にそれぞれ3組の例をあげる。

- (9) a. a wasted year (むだに過ごした1年) / budget one's time (時間の配分を予定する) / Flying saves hours. (飛行機で行くと何時間も節約できる。)
 b. digest an idea (考えを消化する) / swallow a ridiculous story (ばかげた話をうのみにする) / devour historical novels (歴史小説をむさぼり読む)
 c. The highway runs along the coast for a while. (ハイウェイは海岸にそってしばらく走っている。) ——本多 (2005:117) / 『壁と卵』 (Of Walls and Eggs) ——村上 (2009)
- (10) a. rabbit (ウサギ、ウサギの肉) / rose (バラの花、バラの木) / boil the bath (風呂をわかす) / walk (歩く、歩道) / break (こわす、こわれる)
 b. I believe him. (私は彼を信じる。) / I went to him. (私は彼* (の所) へ行った。) You can lead a horse to water, but you cannot make him drink. (馬を水* (辺) に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない。)
 c. The ham sandwich wants a coke. (ハムサンドウィッチ* (の客) がコークをほしいといっています。) / I am parked out back and have been waiting for 15 minutes. (私* (の車) は奥にとめてあるが、15分も待っています。)
- (11) a. undertaker (引き受け人→葬儀屋) / football (フットボール→((米)) アメリカンフットボール、((英)) サッカー) / drink (飲む→酒を飲む) / creature (生き物→人)
 b. It's good to see some new faces in here. (ここで何人かの新顔に会えてうれしい。)
 c. Man does not live by bread alone. (人はパンのみに生きるにあらず。) / *The Chrysanthemum and the Sword*——*Patterns of Japanese Culture* (『菊と刀——日本文化の様式』) ——Benedict (1946)

(9a) は TIME IS MONEY の隠喩で時間を金に見立て、(9b) は IDEAS ARE FOOD の隠喩で考えを食物に見立てる概念メタファーである。(9c) のハイウェイ自体は動かないが、まるで生物のように run の主語になり、道路にそっての移動時間が「しばらく」(for a while) の副詞語句で表現されている。ここでは道路の長さの知覚を時間に反映させて、空間と時間が融合している。(9c) 最後の『壁と卵』は村上春樹がエルサレム賞を受賞したとき(2009年2月15日)のスピーチの演題である。「もしここに大きい壁があり、そこにぶっかって割れる卵があるとしたら、私は常に卵の側に立ちます」というメッセージを送った。このスピーチはイスラエル軍がパレスチナ自治区のガザへ侵攻し

た直後になされたもので、直接侵攻を非難こそしていないが、間接的に比喩を通して人間のあり方を訴えている。ここでの壁は爆撃機や戦車であり、卵はそれらに潰される非武装市民である。あるいは壁は強固なシステムや体制であり、卵はそれに翻弄され立ち向かうひとりひとりの人間である。卵に勝ち目はないようにみえるが、システムがわれわれをつくったのではなく、われわれがシステムをつくったのであり、われわれはシステムに利用されてはならないとしている。隠喩がスピーチ全体の基調に流れている。

(10a) の rabbit は動物の「ウサギ」がその肉にも用いられる（詳しくは後述の (41) 参照）。walk の品詞転換や動詞 break の自他の交替も一種の換喩である。(10b) の最初の 2 例の him は人としての身体ではない。believe につくときはその人柄や発言であり、go to につくときは「彼のいる所」である。最後の例の water は「水」でなく「水辺」になる。英語に続く日本語訳が示しているように、日本語では「彼へ行った」や「水へ連れて行く」という換喩は不適格となる。(10c) は特定の場面で用いられた臨時的なものである。初めの例の ham sandwich はそれを「注文した客」をさし、後の例では I が私の駐車した「車」をさしている。ここでも日本語はそれぞれ「客」や「車」を省略した換喩は不適格となる。先にあげた (4) の比喩も隠喩や換喩によるが、英語が比喩であるからといって日本語でもそのまま比喩になるわけではない。なお (10c) が臨時的用法であるとはいえ、自由に換喩が用いられるわけではない。(10c) の初めの例の類推から「客」の意味で The ham sandwich fell on the floor. とか The ham sandwich needs mustard. などとはいえない。なぜならハムサンドイッチそのものが「床に落ちた」「マスタードが必要だ」の意味が可能なためである (Green 1974:53 参照)。要するに、ham sandwich が臨時に「客」を意味するためには動詞との関連で ham sandwich が「料理」に解釈されないという条件が必要である。

(11) は提喩で、通例 (11b, c) のように一部 [種] で全体 [類] を表したり特殊なもので一般を表す。(11c) 最後の例は Benedict (1946) の書名である。Benedict (1946) は第二次大戦中 (1944 年 6 月)、敵国の日本を理解するために、戦時情報局より人類学者として委嘱された日本研究の報告書である。ここでは一方で花 [菊] を愛 (め) でながら、他方で果敢に戦い [刀] に挑む、一見相反する価値観が共存していることを論じている。ときに (11a) のように全体・一般から一部・特殊を表すことがある。1 語が意味上一部—全体、特殊—一般のいずれを示すかは (7e.f) の特定の—総称的とも関連し、統語上のふるまいに影響を与えることもある。

次にクオリア構造に移る。クオリア (qualia) とはラテン語の「質」や「質感」に由来し、クオリア構造とは事物が本来的に備えている固有の特質を示すものである。固有の特質は 1 つの事物に 1 つとは限らない。焦点の当て方による複数の特質がみられ、未分化あいまい語や多義的あいまい語の基礎となる。1 語に複数のクオリア構造が存在することになり、クオリア構造の違いがしばしば共起語に異なる構造や語義を求めることになる。生成語彙意味論を展開する Pustejovsky (1995:85-91) によると、下記の 4 種の役割が語のクオリア構造を構成して意味解釈に寄与しているという。

- (12) a. 構成：事物とそれを構成する部分である材料・重さ・部分・状況などとの関係
 b. 形式：事物をより大きい領域から識別する関係で物体としての外的な性質である形状・大きさ・色彩・位置など
 c. 目的：活動にかかわる事物の目的や機能
 d. 製造：事物の製造・発生にかかわる製作者・自然・因果関係など

まず名詞のクオリア構造からみてみよう。

- (13) a. The newspaper is on the table. (新聞はテーブルの上にある。) [12b]
 b. The newspaper was censored yesterday. (新聞はきのう検閲を受けた。) [12c]
 c. The newspaper was bankrupt. (新聞(社)は破産した。) [12d]
 d. The newspaper is on strike. (新聞(社員)はストライキをしている。) [12d]
- (14) a. Do you like the book? (その本は気に入ったか。)
 b.i) No, it's terribly badly written. (いや、とてもひどい内容だ。) [12c]
 ii) Yes, it's beautifully produced. (うん、きれいに製本されている。) [12b]
- (15) a. Mary enjoyed [began, finished] the book. [reading]
 b. *Mary enjoyed the dictionary. [consulting]
 c. *Mary enjoyed the highway. [driving]
- (15') a. 花子は本を楽しんだ [? 始めた、 ? 終えた]。
 b. 花子は辞書を (ひくのを) 楽しんだ。
 c. 花子はハイウェイ (のドライブ) を楽しんだ。

(13a-d) の newspaper の意味の違いはそれぞれ文末の [] 内に示しているクオリア構造による。同じように (14a) の返事が (14bi) と (14bii) に分かれているが、これも book の解釈の違いがクオリア構造の違いによる。newspaper や book の意味の違いは (7c) の house と同じく未分化あいまい語や多義的あいまい語を形成している。先にあげた (1a-c) の「頭」の解釈の違いもクオリア構造の違いによる。(1b, c) はそれぞれクオリア構造の構成役割 (12a) と目的役割 (12c) に誘発された換喩 (8b) である。ただし (1d) の「頭」は (8a) の隠喩による語義拡大である。Pustejovsky (1995) や Pustejovsky and Bouillon (1996) によると、(15a) の動詞に続く名詞は単独で出来事 (event) を表し、末尾の [] 内の reading が欠けてもその意味が補われ、(12c) の目的役割が容認されるが、(15b, c) の名詞は出来事を示す述語として [] 内の目的役割の意味を補うことはできない。ただし (15b, c) 末尾の名詞に製造役割を付与した場合、それぞれ [compiling], [building] を補う解釈が可能であるという。(15a-c) にみられる英語のふるまいを一見解決しているかにみえる。しかし (15) に対応する (15') の日本語にはうまく適用できない。(15'a) の目的役割として「楽しんだ」はよいが、[] 内はやや不自然であり、「読み始めた」「読み終えた」のほうが自然である。(15' b, c) は () 内がなくても適格である。なお製造役割としての名詞は英語と同様にいずれの動詞とも結合する。

次に名詞が形容詞と結合する例をみてみよう。(13) は主語である名詞のクオリア構造の違いに応じてその述部である動詞がそれぞれ異なっていた。同じように名詞を叙述する形容詞も名詞のクオリア構造の役割に従って意味が変化する。その意味変化によって、同じ形容詞が多義的あいまい語や未分化あいまい語になる。

- (16) a. a fast door (びたりと閉まったドア) [12a]
 b. a fast ball (速いボール) [12b]
 c. a fast car (速い車) / a fast motorway (高速道路) / a fast waltz (テンポの速いワルツ) [12c]
 d. a fast typist (速いタイプうち) / a fast driver (運転の速い人) [12d]
- (17) a. a warm room (暖かい部屋) [12a]
 b. warm milk (温かいミルク) [12b]

c. a warm sweater (体を温めてくれるセーター) [12c]

d. a warm person (心に温かみのある人) [12d]

(18) a. a topless dress (トップレス・ドレス) (反: long-sleeved) : [12a]

b. a topless dancer ((上半身裸の) ヌード・ダンサー) (同: nude) [12c]

(16) の形容詞 *fast* は基本的に速い動きを表し、それが修飾する名詞のクオリア構造は末尾の [] 内に示している。対象となる名詞の動きが違うため *fast* は日本語訳からうかがえるように、未分化あいまい語や多義的あいまい語になる。(17) (18) の *warm*、*topless* も末尾に示した名詞のクオリア構造と結合している。*warm* との関連で日本語では「暖かい」は気候や気温などに用い、「温かい」は体や心に触れるものや空気などに用い、クオリア構造の役割とは必ずしも一致しない。(17) (18) の形容詞も多義的あいまい語か未分化あいまい語かの判定がそれほど容易ではない。§1 の初めに同じ「大きい」といっても「ノミ・像・塔」で大きさに違いがあると述べたが、これは (12b) の形式役割によるもので通例未分化あいまい語とみなされる。

語義の拡大に寄与している比喩とクオリア構造は互いに影響し合い、その機能を支えあっている。(10a) で *walk* の品詞転換や *break* の自他交替は換喩であるとみたが、*walk*、*break* それぞれの語義に共通部分がある点に注目すると、隠喩的ともみられる。(13) では主語名詞のクオリア構造の役割に応じて述部動詞が異なり、(16) - (18) では形容詞が多義的あいまい語と未分化あいまい語の区別がしばしば困難であるのも、名詞のクオリア構造が動詞や形容詞の用法に影響を与え、語義拡大を誘導しているためである。一般に多義的あいまい語に比べ、未分化あいまい語は諸言語による違いが比較的少ない。そのことは (6) (9) - (11) の比喩による多義的あいまい語に比べて、(7) (13) - (18) のクオリア構造による未分化あいまい語のほうが日英語の表現形式がうまく対応していることからうかがえる。しかしこれは程度の問題にすぎない。言語使用者は語義の拡大において比喩もクオリア構造もそれと意識しないで利用している点で共通している。

3.2. 知識と文脈

言語表現は語を連ねて句・文・言説へと展開するが、いったい何が語の連なりを可能にしたり不可能にするのであろうか。人は生後この世で経験を重ね、現実世界について知識を蓄積し、多様な場面での経験を言語表現していく。その際、§2 でみた多義的あいまい語や未分化あいまい語が示すように、多様な場面に依りて多様な表現が生み出されていく。本節で扱う文脈とは、経験知識が埋め込まれた言語表現において語が共起する他の語とのつながりをさす。知識と文脈は一方で語義を拡大し、他方では語義に制約を課し、語義のあいまいさを除去している。

まず次例を経験知識の面から考察してみよう。

(19) a. a female teacher vs a male teacher

b. ?a female nurse vs a male nurse

c. *a female mother vs *a male father

(20) a. Wash yourself before you eat.

b. He took a bath and washed himself.

(21) a. Arthur poured the butter into a dish.

b. Arthur put the butter into a dish. —Cruse (1986:52)

(22) a. The judge asked where the defendant was. The barrister apologized, and said he was

at the bar across the street. (裁判官が被告はどこにいるかと聞いた。弁護士は謝罪して被告は通りの向かいの酒場にいると答えた。)

b. The court bailiff found him slumped underneath the bar. (廷史は彼が酒場のカウンターの下に倒れているのを見た。)

c. He took him to get coffee before returning to the courtroom. (廷史は被告が法廷に戻る前にコーヒーを飲み連れ出した。)

c'. ?He took him out of the courtroom to get coffee. (廷史は被告を法廷から連れ出してコーヒーを飲みに行った。) —Asher and Lascardes (1996)

(19a-c) の英語は female と male が名詞と結合する際、(不) 適格性に違いがあることを示している。(19b, c) の不適格性は現実世界の知識から判断して、それぞれ冗長性や論理矛盾による。日本語は(19b) に対応する「女[男]の看護師」はいずれも容認され、(19c) に対応する日本語の「女の母親 vs 男の父親」も、「女[男]の」が「白雪」(white snow) の「白い」と同じように、名詞の属性を示すものとして容認される。(20) の wash oneself は多義的で洗うのが体・顔・手のいずれであるかあいまいであるが、日常の知識・習慣に基づき文脈によって (20a) では手、(20b) では体となる。(21) は pour と put の違いから (21a) は熱くて液状化したバター、(21b) は固形のバターとみなされる。(22b) の文を単独で解釈しようとするれば、bar は court bailiff との関連で「被告席」の意味になるであろうが、(22a) に続く文脈での bar はいずれの場合も「酒場」となる。(22a, b) に続く文として (22c) は適切であるが、(22c') は不適格である。(19) - (22) では現実の経験や知識から語義を決定し、語と語の結合の可否を判断している。

次の場合はどう考えるべきであろうか。

(23) a. strong arguments vs powerful arguments

b. strong tea vs ?powerful tea

c. ?a strong car vs a powerful car

(24) a. drink wine [water] vs *drink rock [time, sound]

b. eat meat [toffee, jelly, sweets, soup]

c. take one's medicine [a tablet, a pill]

d. 酒[水、スープ、薬]を飲む vs 肉[ごはん、ゼリー、菓子]を食べる

(25) a. 荷物を預ける (check, leave)

b. 子供を隣人に預ける (leave)

c. 銀行に金を預ける (deposit)

d. 命を預ける (devote)

e. 勝負を預ける (entrust)

f. 体を預ける (lean)

(26) a. I go for a run every morning. (毎朝走っている)

b. The tail-end batsman added a single run before lunch. (一点追加した)

c. The ball-player hit a home run. (ホームランを打った)

d. We took the new car for a run. (新車に乗って小旅行に行った)

e. He built a new run for his chickens. (新しい養鶏場を建てた)

f. There's been a run on the dollar. (ドルに大需要があった)

g. The bears are here for the salmon run. (クマがサケの群れを狙ってここにいる)

——Saeed (1997:60)

(27) a. Pat kicked the wall. [他動詞構文]

b. Pat kicked the football into the stadium. [使役移動構文]

c. Pat kicked Bob black and blue. [結果構文]

d. Pat kicked his foot against the chair. [擬似目的結果構文]

e. Pat kicked Bob the football. [二重目的構文]

f. Pat kicked at the football. [動態構文]

g. The horse kicks. [自動詞構文]

h. Pat kicked his way out of the operating room. [way 構文] ——Goldberg (2001)

(23) の strong と powerful はしばしば同義語とされるが、常に交替可能なわけではない。統語的・意味的に連結可能とみえる語の中にはコロケーションと呼ばれ、使用頻度の高いものと低いものがある。共起語として慣用句 (idiom) ほど固定的ではないが、「好きな」語と「嫌いな」語がある。(23) の (不) 適格性の違いはこのコロケーションの違いによる。(24a) の (不) 適格性の違いは、純粹に意味上のものであるが、(24b-d) はコロケーションによる。英語の eat はナイフとフォークを使ったり、かむ (chew, bite) 場合だけでなく、jelly, soup のようにスプーンだけ使ったり吸う (suck) だけの場合もある。スープもカップに口を当てて飲む場合は drink ともいう。(24c) の薬については通例 take を用いるが、水薬 (liquid medicine) については drink も可能である。(24d) の日本語では味噌汁やスープは「飲む」が、薬は錠剤でも「飲む」。(24b-d) の飲食において eat, drink 「飲む」は意味上明確に区別することが困難である。ここにはコロケーションによるとしか説明がつかないものが多い。(23) (24) では共起する語により語義の使用が制限されるのに対して、次の (25) - (27) では共起語や構文により語義が拡大している。(25) は日本語の例である。共起する語との関係で「預ける」は多様な意味に用いられ、英語に訳すとその多くは異なる語となる。(26) の run も同様である。go for, batsman, chickens, dollar など、他の語によって与えられる文脈に合うように語義を拡大している。(27a-h) の kick は「足でける」の意味を共有しているが、それぞれ共起語とのつながりが異なる構文を形成することにより統語・意味上の違いをもたらしている。

経験による知識と言語表現による文脈は相互に影響を与え、影響を受ける関係にある。その過程で語義は創造的に意味を拡大しながらも、コロケーションによっても共起する語に制限を受けている。語義が無制限に拡大するとあいまいさが増し、言語記号の役割をはたせなくなる。そこで経験知識や文脈、あるいはコロケーションは統語・意味上の制約の中で、一方では語義を拡大し、他方では語義の拡大を制御している。繰り返し進行している語義の拡大と制御の結果が言語の変化をもたらしている。

3.3. 語義の判別テスト

これまで同じ発音やつづりからなる同音異義語・多義的あいまい語・未分化あいまい語を論じてきた。重要なことはこのようなあいまい語の違いが統語上言語表現にどのように現れるか、またあいまいであるためにどのような場合に言語表現として (不) 適格になるのかを明らかにすることである。本節は主に多義的あいまい語や未分化あいまい語を中心にあいまい語の判別基準を考察する。

あいまい語の判別テストとしていくつかの方法が提案されている。まず等値テスト (co-ordination

test) からみてみよう。当たり前のことながら、1語は1つの意味に用いられる。したがって and などで併置される語句、あるいは併置語句に言及する動詞や形容詞は意味上等値であることが求められる。問題は何をもちいて等値とするかであり、その判別は人によって異なることがある。

- (28) a. John and Bill went to the bank.
 b. The room and the furniture were light.
- (29) a. I saw Helen and a football match yesterday. (きのうヘレンとフットボールの試合を見た。)
 b. I felt cold and miserable. (寒くてみじめな気持ちになった。) ——Wierzbicka (1981:106)
 c. Our office typist is fast and bearded. (事務所のタイピストは打つのが速くてあごひげが生えている。) ——Copestake and Briscoe (1996)
- (30) a. John painted and walked through the door. (ジョンはドアにペンキを塗ってドアを通り抜けた。)
 b. Plato, who was a great man, is on the top shelf. (プラトンは、偉人だったが、その本は一番上の棚にある。) ——児玉 (2002:50)
 c. The newspaper Jan's reading almost went bankrupt in 1983. (ジャンが今読んでいる新聞は1983年に倒産寸前だった。) ——Green (1996:30)
 d. *The newspaper fired its editor and fell off the table. ——Copestake and Briscoe (1996)
- (31) a. Mr. Pickwick took his hat and his leave. (ピックウィック氏は帽子をとり、去っていく許しをもらった。) ——Jaszczolt (2004:244)
 b. (*) John and his driving license expired last Friday. = (*) John expired last Friday as his driving license. (ジョンとその運転免許は先週の金曜日に息を引き取り失効した。)

(28a) では同音異義語の bank を2様に解釈して一人は「銀行」へ、他方は「川岸」へ行くことはできない。同様に (28b) の多義的あいまい語の light も「明るい」か「軽い」かの一方の意味にのみ用いられる。何をもちいて等値とするかは必ずしも明確でない。(29a) は see の対象が「人」と「競技」で異なり、(29b) の cold は身体的状態、miserable は心理的状态であり、(29c) の typist は fast との関係ではクオリア構造の目的役割、bearded との関係では構成役割をはたしている。ここでは多義的あいまい語も未分化あいまい語も等値が認められているが、構文によっては等置された語句の容認度が異なる。例えば (29a, b) を ?Helen and a football match were seen yesterday. / He made me feel miserable [?cold]. とした場合、容認度が違ってくる(児玉 2008:165 参照)。前者では等値であるはずの A and B が主語となっているため不自然である。後者では使役動詞 make が強い強制性をもつとはいえ、cold という身体的状態まで変えることは不可能である、その点、miserable と cold は意味上異質な形容詞である。1語が他の語との関係で複数の役割をはたす用法はくびき語法 (zeugma) と呼ばれる。(29a-c) では1語の動詞が A and B で意味上やや異質な名詞や形容詞と結合しており、くびき語法的である。くびき語法は1語の有する意味上の異質性や構文の違いにより容認度が異なる。(30) も一種のくびき語法であり、いずれも未分化あいまい語または多義的あいまい語の例である。(30a) の door は2つの動詞(句)と関連し、paint とのつながりでは形式役割、walk through とのつながりでは構成役割をはたしている。(30b-d) の Plato, newspaper もそれぞれ形式役割・目的役割・製造役割のうち2つの役割をはたしている。(30a-d) はすべて1語が2役をはたしており、そのうち (30a-c) は通例容認される。しかし同じ newspaper からなる (30c) と (30d)

は不思議に容認度が異なる。(30d) が不適格であるのは、先ほど (29a) との関連でみたように、*newspaper* が単独で主語であるためかもしれない。(31a, b) はすべて多義的あいまい語からなるくびき語法である。多くの場合、不適格となるが、パン (pun) を含意しており、駄じゃれの一種として容認されることもある。(28) - (31) からうかがえるように、等値テストは同音異義語や多義的あいまい語にも未分化あいまい語にも適用される。等値テストに違反した場合、同音異義語はもちろん不適格であるが、多義的あいまい語は不適格で未分化あいまい語は適格であるとは必ずしもいえない。逆にいえば、多義的あいまい語と未分化あいまい語の境界は不透明である。

次に等値テストに似た同一テスト (identity test) に移る。同一テストとは照応表現による判別テストで *do so* テストとも呼ばれる。

(32) a. *Mary went to the bank, an/and so did Ruth.*

b. *Mary was wearing a red shirt, and so was Ruth.*

c. *Mary has adopted a child; so has Ruth.*

(33) a. *Mary cried, and so did Ruth.*

b. *John and Martha left.* (ジョンとマーサはそれぞれ去った／ジョンとマーサはいっしょに去った。)

c. *John and Martha are married.* (ジョンとマーサはそれぞれ結婚している／ジョンとマーサへ結婚している。)

(32a) の *bank* は同音異義語であり、*John* と *Ruth* の行った先は「銀行」か「川岸」のいずれか一方の同一のものでなければならない。*John* が「銀行」へ行き、*Ruth* が「川岸」へ行った場合、同一テストに違反して不適格になる。(32b) の *red* は「赤」についての未分化あいまい語であり、*Mary* が *scarlet shirt* を着て、*Ruth* が *crimson shirt* を着てもよい。(32c) の *child* も性について未分化あいまい語であり、*Mary* が養子にしたのが男の子で、*Ruth* が女の子であってもよい。(32) では同音異義語と未分化あいまい語で意味上のふるまいが異なる。(33a) では *Mary* も *Ruth* も同じように「声をあげている」。Lyons (1977b:406) は *cry* に (32b) の *red* のような一般性、つまり未分化あいまい性がなく、(32a) の *cry* は *weep* か *shout* のいずれか一方でなければならないとするのに対して、Palmer (1981:106) は *Mary* が *weep* し、*Ruth* が *shout* してもよいとしている。Lyons と Palmer の間で *cry* の 2 義を多義的とみるか未分化とみるかで意見が分かれている。同じように (33b, c) の解釈についても意見が異なる。Zwickey and Sadock (1975) によると、(33b, c) は多義的あいまい構文で () 内の 2 通りに解釈されるが、それぞれに *and so did Dick and Pat* や *and so are Dick and Pat* をつけ加えると、まるで未分化あいまい構文であるかのように、いずれも交替解釈が可能で 4 通りの意味が生まれるとするのに対して、安井 (1978:191) は (33c) に交替解釈はないとしている (詳しくは児玉 2002:32,55 参照)。同一テストにおいても多義的あいまい語と未分化あいまい語の不明瞭さがうかがえる。

第 3 の判別法として自立性テストがある。多義性が自立しているか否かを問うものである。その 1 つの基準として 1 語の異なる意味に対応して同義語や反意語が、あるいは包摂関係にある固有の関連語が存在するか否かのテストがある。例えば *light* の多義的な「明るい、軽い」の反意語としては *dark*, *heavy* があり (*fair* については (6a) 参照)、*bank* の「銀行」は *financial institution*、「川岸」は *river* などの関連語をもつ。ここで注意すべきことに、意味の違いを意味を用いて判別しようとするむずかしさがある。多様な意味の同義語や反意語が常に見出されるわけではないし、また語義そ

のものは微妙なものであり、自立した語義をなすか否かの判断が個人によって異なることもある。(33a) の等値テストでみたように、Lyons と Palmer の判断が異なるのも、cry の解釈の違いによる。Lyons が cry に自立した意味として weep と shout を認めるのに対して、Palmer は意味の一般性を強調して cry は「声をあげる」を意味するとみている。両者の違いは (6c, c') でみた dog, lion, man の多義性と類似している。それぞれの語は異なる文脈で「犬、ライオン、人」の一般的な意味とともに、「オス犬、オスライオン、男」の特定の意味を有しているが、(6c) のような同じ文で両方の意味に自立して用いられるか否かについては人によって判断が揺れる。

第4の判別法に真理条件テストがある。これは yes-no 疑問文に対して肯定 (yes) と否定 (no) の両方に答えても真である場合、多義であるとみなされる。

(34) a. Have you had a drink in the last six hours?

b. Have you spoken to a teacher?

(34a) の yes-no 疑問文に対して「酒は飲んだが (yes)、水は飲まなかった (no)」と答えられるのは drink の「酒、水」が多義的であいまいなためである。ところが、(34b) の答えは「先生と話をした」か「話をしなかった」の一方に限られ、「女の先生と話をした」が「男の先生とは話をしなかった」とは答えられない。これは teacher の意味が「(女か男の) 先生」の未分化あいまい語のためである (Cruise 2003 参照)。しかしこの判別法はことばの表現上のものにすぎない。現実世界には例えば肘掛や背が低くて chair と stool と呼べるものがあり、それを見て This is a chair. といたとしても、真とも偽とも決めがたい (Chierchia and McConnell-Ginet 2000:102)。同じように皿ともどんぶりともみえる容器の中にある卵を見て an egg on a plate (皿に載っている卵) と an egg in a bowl (どんぶりの中の卵) のいずれに表現すべきかを論じても意味がない。真理条件で解決するものでもない。自然言語は §1 でみたように、本来、あいまいさを有しており、意味論は真理条件を利用して、そのあいまいさを解決することはできない。

本節は4種の判別テストを検討したが、いずれにも問題がある。同音異義語・多義的あいまい語・未分化あいまい語を区別する決定的な判別法が存在するわけではない。しかし現実には多様な表現に対して適格・不適格の判断がなされる。決定的な判別法が存在しないとすれば、できるだけ多くの人の(不)適格性判断に近づくことが意味論の課題となる。その観点から、例えば語彙意味論をとりあげてみよう。open, break などの他動詞を語彙的使役動詞と称し、「使役」の意味を抽象的な CAUSE で表している。この分析は open, break などの自動詞使用法と他動詞用法が共有する意味を簡単に表示する利点をもつ。しかし肝心な CAUSE は未分化あいまい語ではない。強制・誘引・容認・意図などにおいてさまざまな「使役」を含み、それに呼応して CAUSER (原因となる主語) も一様ではない。CAUSE は多義的あいまい語であり、そこには同じ分析的使役動詞の make, let, have, get などの意味が混在している(詳しくは兎玉 2008:163-165, 高見 2009 参照)。語彙意味論には CAUSE (R) そのものの意味をより詳しく分析する課題が残っている。

4. 気まぐれな語義拡大と諸言語の異同

4.1. 英語における語義拡大

自分の思いを伝えようとするとき、人は世界の知識を基礎に関連した語句を連ねて文脈をつくり自分の思いを言説にまとめていく。その際、既存の語に満足しないときは、既存の語義を拡大した

り、新しい語をつくっていく。語義の拡大は主として比喩やクオリア構造を利用してなされるが、品詞転換や構文の拡大という統語上の用法を介してなされることもある。英語は諸言語の中で最も徹底して語義の拡大を進めている言語である。つまり1語の有する語義が多く、多様な品詞や構文に用いられる。それだけに英語の語義を正確に知るためには、世界についての知識はもちろん、何よりも文脈の把握が求められる。そのことは§3.2でみた(26)(27)の用例からもうかがえる。

英語は豊富な語義や柔軟な用法をもつことから、語義拡大のモデルとみられるかもしれないが、語義の拡大に必然的なつながりがあるわけではない。例えば *air* の「空気、外見、曲；空気にあてる、放送する」には何のつながりがあるのだろうか。*key* の「(ドアなどの)かぎ、(ある地点への)要所、(ピアノなどの)鍵」、*charge* の「(金額を)請求する、(責任などを)負わず、指令する、非難する、充電する；料金、世話、攻撃」、*check* の「止める、調べる、預ける；妨害、照合、伝票」、*spring* の「春、ばね、泉；はねる、生じる、裂く」、*subject* の「題目、学科、主語、臣民」なども同様である。これらの語義は比喩やクオリア構造により拡大したり、同じ印欧語の他言語より異なる時期に入ったものであろう。しかし語義間に必然的なつながりはなく、日本語からみると、まるで同音異義であるかのように、異なる語句で表現される。

英語は隠喩が幅広く用いられ、しばしば生物も無生物も同じようにふるまう。

- (35) a. John opened the door. (ジョンがドアを開けた。) [動作主]
 b. John saw the summit meeting. (ジョンは首脳会談を見た。) [経験者]
 c. The wind opened the door. (?? 風がドアを開けた。) [自然の力]
 d. The key opened the door. (* かぎがドアを開けた。) [道具]
 e. This summer saw the summit meeting, (* 今夏が首脳会談を見た) [時間]
- (36) a. John [The dinner] is ready. (ジョン [食事] は準備できている。) →
 The shirt is ready. (シャツはできあがっている。)
 b. The dress is available in all sizes. (そのドレスはどのサイズでも手に入る。) →
 The mayor is available now. (市長は今手がすいている。)

(35a-e)の主語は末尾の[]内の意味役割を有している。意味役割には主語になりやすいものとなりにくいものがあり、意味役割は(35a)から(35e)の順に主語になりにくい階層をなしている(詳しくは兎玉1987:97参照)。英語は(35b-e)のように多様な意味役割が主語に用いられ適格であるが、日本語は()内の疑問符やアスタリスクが示しているように、意味役割の主語選択階層に従って容認度がだんだん低下している。英語の(35c, d)は[自然の力]や[道具]が(35a)の[動作主]の隠喩として用いられ、(35e)の[時間]は(35b)の[経験者]の隠喩として用いられ、いずれも適格である。これに対して日本語は無生物主語に厳しく、通例主語に生物のみを許す。(35e)の容認度が最も低いのは動作主でなく経験者の比喩として無生物が用いられ、無標の(unmarked)主語選択階層を二重に破っているためである。(36a)の形容詞 *ready* は通例人が出かけたり、食事が食べられる「準備ができている」ことに用いられるが、物への適用範囲が拡大して、注文した洗濯物や縫い物などが「できあがっている」ことを表し、(36b)の *available* は通例事物が入手可能で人に「役立つ」(*avail*)ことを表すが、人にも拡大して「手がすいて接触できる」ことを示す。ここでは生物・無生物の区別より、むしろ目の目的や都合のよさに焦点がある。

人間の関心は外界の多様な事物に均等に向けられているわけではない。文において主語は図(*figure*)として最も強い焦点をあてられ、他はそれを支える地(*ground*)の役をはたす。人の認知能

力の普遍的な側面から図・地の原則として無生物より生物、生物でも動物より人、人でも3人称の者より1・2人称の者が強い焦点をあてられる主語になりやすい。(36)や次例の主語選択の背後にはこの図・地の原則が働いている(詳しくは兎玉 1987:90,1991:117 参照)。

- (37) a. Rats desert a sinking ship. (ネズミは沈没する船を見捨てて逃げる。) vs ?A sinking ship is deserted by rats. (沈没する船はネズミに見捨てられる。)
 b. There is an old man walking a dog. (老人が犬を散歩させている。) vs (?) There is a dog walking a man. ((?) 犬が老人を散歩させている。)
 c. I met her on the street. (私は通りで彼女に会った。) vs *She met me on the street. (*彼女が通りで私にあった。)

図・地の原則は絶対的なものではないが、言語普遍的にみられる1つの傾向である。上記の対では通例前者の文が用いられ、後者の文がしばしば不自然になるのもそのためである。その点、(35c-e)の英語が比喩により主語を無生物に広げることが、図・地の原則や主語選択階層とのせめぎ合いのうえに成り立っている。そのため(35c)から(35e)の下段にいくに従って使用頻度は低くなる。(36)の比喩は生物と無生物の状態を形容詞で叙述するもので、語義の拡大においてそれほどの抵抗はない。

英語の語義拡大も無原則に広がっているわけではない。そうかといって、語義が論理一貫性をもって拡大しているわけでもない。語義が類似していることが必ずしも同じふるまいを保証しないし、焦点のあて方によって同じ語が相反する意味に用いられたり、逆に反意語とみられるものが同じ意味に用いられることもある。

- (38) a. The sun is out. (太陽が出ている。)
 b. The light is out. (明かりが消えている。)
 (39) a. Bill climbed up [down] the mountain. (ビルは山を登った [降りた]。)
 b. Bill walked up [down] the street. (ビルは通りを歩いた。)
 (40) a. in love [pain, ecstasy, despair, anger] vs *in hate [happiness]
 b. break one's journey [*trip] (旅を中断する) / announce [*express] one's candidacy (立候補を表明する) / die at one's post [*position] (殉職する)
 c. de- : 否定 = demerit (欠点)、下降 = descend (下る)、分離 = dethrone (退位させる)、強意 = delimit (範囲を定める)
 d. shameful ≡ shameless (恥かしい) / flammable ≡ inflammable (可燃性の)

(38a,b)には同じoutが用いられているが、ほぼ逆の意味になっている。(38a)では太陽が話し手の視界に入って「出ている」のに対して、(38b)では明かりが視界になく「消えている」とみられる。(39a)はupとdownが反意語として山の登り降りに用いられているが、(39b)では必ずしも坂道でなく、平坦な道の移動にも用いられている。(40a)はIDEAS ARE FOODの概念メタファーの一種で経験者を容器と見立てた隠喩とみられるが、これも恣意的で必ずしも常にinが用いられるわけではない((38)-(40a)について詳しくはHuddleston and Pullum 2002:651-653参照)。(40b)でも名詞や動詞の意味が類似しているからといって、他の語と同じように結びつくわけではない。(40a,b)は、(23)-(25)でみたように、共起する語がコロケーションにより制約を受けている。(40c)では多様な意味の拡大が接頭辞にも及んでいる。(40d)の接辞-fulと-lessの対やin-は、careful—careless, active—inactiveのように、本来、反意語を意味するが、ここでは例外的に反対の意味と

なっていない。ただし *shameful, shameless* については日本語でも「恥かしい」「恥知らず」はほぼ同じ意味を表すが、これは話し手の視点が恥すべき人の内側にあるか外側にあるかの違いであろう。

気まぐれな語義拡大は換喩にもみられる。

- (41) a. *apple, banana, pear*
 b. *rose, daffodil, tulip*
 c. *lamb, rabbit, chicken*

(41a) は果物とともにその果実のなる木を表し、(41b) は花とともにその植物を表す。これに似た *cherry* は (41a) のように「サクランボ」と「サクランボのなる木」つまり「桜の木」を表し、(41b) と違って「桜の花」は *cherry blossom* となる。(41c) は可算名詞の動物とともに非可算名詞で動物の肉も表すが、*pig, cow, sheep* などは可算名詞の動物だけを表し、その肉は *pork, beef, mutton* となり、ここでも一律に換喩が適用されていない。

提喩の場合はどうであろうか。(11a) の *drink* (飲む→酒を飲む) は類で種を表すにしても、*eat* が特別の食事をさすわけではない。また *ship* (荷を船で運ぶ→送る) は種で類を表すが、*truck* (トラックで運ぶ) は種のみで類を表さず、*car* にいたっては動詞で「車で運ぶ」意味さえない。提喩も語によって気まぐれに語義を拡大している (提喩については §5 で詳しく考察する)。

§ 3.1 の冒頭でみたように、比喩は目に見える事物の空間上の位置・移動の知覚を他の領域に転用拡大していき、一般に具体から抽象へ語義を拡大していく。しかしこれにも例外がある。例えば *beauty* は「美」から「美人」、*discord* は「不和、不一致」から「不協和音」が生まれ、抽象的な非可算名詞から具体的な可算名詞へ拡大している。

品詞転換や自動詞・他動詞の交替は、§ 3.1 でみたように、多義で一応換喩にぞくするとした。このような統語上の用法や形式は語義の拡大とも関連するが、ここでは自動詞と他動詞の語形態と自他交替による意味変化に絞って考察する。

- (42) a. *open, break, run, ring* vs *swim* (vi), *wound* (vt)
 b. *butter* (バターを塗る) vs **mustard* (マスタードを塗る) / *bag* (袋に入れる) vs **envelope* (封筒に入れる) / *bottle* (ビンに詰める) vs **basket* (かごに入れる) / *knife* (ナイフで切る) vs **sword* (刀で切る) / *dust* (ちりを払う) vs **mold* (カビを取る)

- (43) a. *Tigers only kill at night.* vs **The tiger killed.*
 b. *That man always recycles.* vs **That man always breaks.*
 c. *John picked up the glass of beer and drank (it).* (ジョンはビールのグラスを取り、それを飲んだ。) vs *John drinks only gin, but I don't drink (it).* (ジョンはジンだけを飲むが、私はジン [酒] を飲まない。)
 d. *John ate at noon in an hour [?for ages].* (ジョンは1時間かけて正午に (昼食を) 食べた。) vs *John ate hungrily *in an hour [for ages].* (ジョンは食べ方が長年ガツガツしていた。)

(42a) の *vs* の前の語は自動詞 (vi) にも他動詞 (vt) にも用いられるが、*vs* の後の語は不思議に自動詞か他動詞に限られる。(42b) の *vs* の前の語は名詞とそれから派生した動詞に用いられるが、それに類似した意味をもちながらも、*vs* の後の語は動詞に用いられない。(42a, b) の用法・意味上の転換も恣意的で半生産的なものである。(43) は目的語の有無など動詞のふるまいに関する例である。(43a, b) は Goldberg (2001)、(43c, d) は Cornish (2007) による。(43a) において本来他動詞で

ある *kill* は目的語が不特定で動詞が行為の繰り返しや一般的陳述を表すときにのみ許される。vs の後の例は過去時制であり、不特定の目的語であっても、繰り返しや一般性を含意しないため不適格である。(43b) の *recycle* は通例ゴミを再利用するのに対して、*break* は何をこわすのか不明である。省略される目的語がすぐ連想されるか否かによって (不) 適格性が異なる。(43c) の前の文は *it* があってもなくても意味に変わりがないが、vs 後の文は *it* がある場合「私もジンを飲まない」が、*it* がある場合、一般的に「私は酒を飲まない」となる。(43d) の2つの文は動詞直後の副詞語句が *at noon* と時間を表すか *hungrily* と様態を表すかで動詞のふるまいが異なる。前者では時間副詞が昼食を食べ終えた完結性 (telecity) を含意し、後者は様態副詞が動詞の行動に焦点をあてるため食べ終えたことを含意しない。ここでは完結性の違いが後続する *in an hour* と *for ages* の (不) 適格性に反映している。

本節の多くは英語固有のもので他言語では異なるふるまいを示す。英語だけをみても、語形態と意味の間には気まぐれで恣意的な関係が多く、統語法と意味の間にも複雑な関連があり、すべてが規則で律しられるわけではない。気まぐれや複雑性の強いところでは個人により (不) 適格性の判断がしばしば揺れる。

4.2. 諸言語における語義拡大や意味の異同

同音異義語は言語が歴史的に変化する過程で生まれた個別言語固有のものであり、諸言語間の異同においては考察対象にならない。問題は多義的あいまい語と未分化あいまい語の意味にどのような異同があるかということになる。

人は喜んだり、悲しんだり、泣き、怒り、苦痛を感じたり安堵を感じたりする。人の感情や感覚には多くの普遍性があり、領域によって異なる感覚も時に共鳴する。「甘い声」は味覚が聴覚の領域に、「熱い視線」は触覚が視覚に、「硬い金属音」は触覚が聴覚に拡張されている。このような共感覚表現は主に隠喩や換喩を介して生まれている。しかし共感覚表現は語義の拡大の一部にすぎない。まして共感覚表現の延長線上に語義拡大や認知言語学が存在するものではない。感情・感覚とその表現は別問題である。生得的な感情や感覚もことばに表現したとたん、そこには生後の経験による感情や感覚が入り込んでくる。上例でも「甘い、熱い、金属」が地球上どこにいても同じ含意で迎えられるわけではない。例えば「風」も *wind* も日英語の一般的な語であるが、「風」は「そよ風」や「風薫る」などの心地よさとうまくつながるが、*wind* はむしろ逆であり、*breeze* との対比で「不快な風」も含意し、ときには「大風」や「息」にもなり、*break wind* で「おならをする」し、*go to the wind* で「全滅する」ことにもなる。語義拡大には言語固有の展開がみられる。

§ 3.1 の冒頭では語義拡大には何らかの体系性があると述べた。確かに語義拡大は無原則に行なわれるわけではない。しかしその体系性には大きな柔軟性があり、気まぐれな展開が入り込む余地がある。そうした幅や余地があるため、諸言語で多くの違いが生まれることにもなる。

意味を語で表示するか句で表示するかは、言語によって異なる。例えば屈折言語のラテン語では動詞の語幹に主語の人称・数、能動・受身の態、現在・過去・未来時制などを示す屈折接辞がつく。そのため英語の *I love, I will love, we love, we will love* に対応するラテン語は *am-ō, amā-b-ō, amā-mus, amā-bi-mōus* だけですむ。屈折変化を失った英語の名詞は他の語との関係を示すために語順や前置詞を借りるが、ラテン語では格を示す接辞を名詞につけるだけで、語順上、文中のどこに位置しても意味は変わらない。

意味の表示が語によるか句によるかの違いは、一方では言語がラテン語のような屈折接辞や日本語にみられる膠着接辞をもつか否かによるが、他方では語義を多様に拡大するか否かによる。語義拡大が少ない言語は他言語で多様な語によって区別される意味を1語で表したり、逆に他言語で1語で表示される意味を異なる語や句によって表すことになる。§4.1の冒頭で述べたように、英語は諸言語の中で最も徹底して語義拡大を進めている。まず英語と日本語を比較してみよう。

(44) a. guest, visitor, patient, customer, client vs 客

b. practice vs 実行 (する)、慣行、業務、開業 (する)、練習 (する)、けいこ (する) …

(45) a. run vs 走る、走って行く [逃げる、追う]、競走する、流れる、あふれる、動く；走らせる、流す；走すること…

b. water vs 水、水溜り、水中、水域、水溶液、湯；水をまく、給水する、水を加える…

(46) a. a healthy body 健康な体 / a healthy complexion 健康 (そう) な顔色 [12b]

b. healthy food 健康 (に役立つ) 食品 / healthy exercise 健康な [によい] 運動 [12c]

c. healthy circumstances 健康な環境 / a healthy society 健全な社会 [12d]

(44a) の英語はどこを訪ねるかによって呼称がそれぞれ異なるが、日本語では「訪ねてくる人」は誰でも「客」になる。逆に (44b) の英語 practice の意味は日本語では多様な語または句で示される。多くの場合、英語は (45a,b) からうかがえるように、語義の拡大が日本語よりはるかに広範囲にわたり、1語が複数の品詞にも用いられ、多義性に富んでいる。そのことは同じ規模の英語・日本語の辞典を比べてみるとすぐわかる。(45) の run と「走る」、water と「水」を含め、しばしば英語の1語には日本語の1語の10倍以上の語義が与えられている (run の名詞については (26a-g) も参照)。その主要な原因は、英語では1語の動詞に多様な名詞が共起し、結果的に動詞や名詞の意味が複雑になるのに対して、日本語では1語の動詞と共起する名詞の範囲が限られ、結果的に動詞や名詞の意味が少なくてすむためである。その点、日本語で多様な名詞と共起する (25) の「預ける」などは例外的なものである。多義性の違いが概念の濃淡や思考過程に直接影響するわけではない。英語で1語で表すところを、日本語では語や句、あるいは接辞で意味や品詞の違いを表すにすぎない (その他、日英語の違いについて詳しくは兎玉 2008:142-144 参照)。(46) は healthy が多様な名詞と結合した例である。healthy が日本語で常に「健康な」に対応するわけではない。(46a-c) の healthy のあいまい性はこれまで因果関係を中心に比喩を用いて説明されてきたが、比喩だけで説明されるものではない。ここには (46a-c) 末尾に示したクオリア構造も関与し、§3.1 末尾で述べたように、形容詞 healthy にも多義的あいまい語と未分化あいまい語が混在している。

余談ながら、我が家の近くに「ゴルフフリー (Goalfree)」という名の中学高校向けの進学塾がある。「一人ひとりの夢 一人ひとりの個性 たいせつに」と個別教育を看板にしている。ここでカタカナと英語を併用した名称にケチをつける気は全くない。この日本語名は「飲食自由の劇場」、「持ち込み自由の試験」などにならって、「だれもが自由に目標の志望校に入れるよう指導します」といいたいのであろう。しかし英語名の Goalfree は「目標・志望がない」になってしまう。日英語のズレの原因は、英語の free には「自由の」のほかに、「(不快なものが) ない (of, from)」の意味があり、名詞につく -free は saltfree (塩分のない) のように後者の意味にのみ用いられることにある。したがって例えば This station has become smoke-free. といえば「この駅は全面禁煙になりました」であり、「喫煙自由」とはならない。このようなズレが生じるのも、日本語では英語のように「自由」と「(不快なものが) ない」が結びつかないためである。同じように、日本語のアンケートで yes か

no でお答えくださいという場合がある。例えば「あなたは麻薬を吸ったことはありませんか」という質問にはどう答えたらよいのであろうか。「はい、吸ったことはありません」と答えたい場合、日本語流に yes と答えるべきか、英語流に no と答えるべきか迷う。

語の意味や用法が歴史的経過の中で言語間で異なる変化を示すため、同じ印欧語の中でも語義や語の用法に異なるふるまいがみられる。

(47) a. A dollar doesn't buy much these days. (この頃1ドルではあまり買えない。)

b. We don't buy much for a dollar these days.

(48) a. sheep, mutton / furniture / pass an examination

b. apple, gooseberry, walnut

(49) a. like (好きである), miss (~がないのが淋しい)

b. Use your head. (頭を使え。)

c. I arrived safely here yesterday. / I must get up at six every morning.

(35) において英語は生物と無生物の区別立てに厳しくなく、一種の隠喩として無生物が擬人化されて主語になると述べたが、英語での擬人化は (47a) にまで及んでいる。同じ系統のドイツ語でもこのような無生物主語は許されない。他の言語では一般に (47b) の形式をとる。(35e) のように時間を主語にとる構文もまれで、他の印欧語では通例 They [We] had the summit meeting this summer. の形式をとる。(48a) において英語の sheep (羊) と mutton (羊肉) は動物とその肉が別の語で表されるが、フランス語では mouton が両方の意味に用いられ、英語の furniture (家具) は非可算名詞であるが、それに対応するドイツ語 Möbel は可算名詞である。また英語の pass an examination は「試験に合格する」であるが、同じ語源に由来するフランス語の passer un examen は「試験を受ける」である。(48b) の語は英語と同じようにイタリア語・スペイン語でもその果実と木の両方に用いられるが、ロマンス語は多くの場合、果実は女性形、木は男性形で区別される。(49a) の主語は英語では意味役割の経験者が主語になるが、イタリア語やギリシャ語は刺激を与えるものが主語となり、経験者は英語の irritate (いらいらさせる) と同じように斜格になる。フランス語も英語の I miss you. (あなたがいなくて淋しい) は Vous me manquez. となる。(49b) の「頭」は用例 (13) (14) で述べたように、(1b) の「太郎は頭がいい」と同じく「頭脳」を意味する。名詞のクオリア構造の目的役割 (12c) に誘発された換喩 (8b) であり、通例 (49b) 全体は「頭を使ってよく考える」の意味になる。しかし Schroten (2000) によると、オランダ語でこの直訳は不適格であり、英語に訳せば Use your intellect [brain]. となり、スペイン語でも英語の直訳はまれで、普通 Think (a little) . となる。フランス語での直訳は文字通りの意味にのみ用いられ、英語の換喩の意味では Use your brain. になるという。(49c) の初めの例のように英語の副詞は一般に様態・場所・時間の順序で動詞に後置するが、ドイツ語ではその逆で Ich bin gestern hier glücklich angekommen. となる。また同じ種類の副詞 (句) は (49c) の後の例のように英語では狭義のものが前に置かれるが、ドイツ語はその逆で Ich muß jeden Morgen um 6Uhr aufstehen. と日本語のように広義のものが前にくる (詳しくは三好 1977:347 参照)

次に日常的によく用いられる代名詞を対象に印欧語のふるまいを比較してみよう。

(50) you vs tu—vous

(51) a. John₁ adored himself₁. vs John₁ adored him₂.

b. *Rint veracht zich. vs Jeg barberede mig.

Rint despises self I shaved me
 'Rint despises himself.' 'I shaved myself.'

(50) において英語の 2 人称代名詞は *you* だけであるが、ヨーロッパの多くの言語では親密な間か、ていねいで改まった間かで呼称が異なる。フランス語の *tu—vous* に対応して、ドイツ語の *du—Sie*、オランダ語の *jjij—u*、イタリア語の *tu—lei*、スペイン語の *tu—usted*、ロシア語の *ty—vy* などである。(51a) からうかがえるように、英語では一般に再帰代名詞と代名詞が相補分布をなしている。つまり再帰代名詞は代名詞が生じないところでのみ生じ、逆に代名詞は再帰代名詞が生じないところでのみ生じる。(51b) は英語と同じゲルマン語系に属するオランダ語の例である。オランダ語では英語と違って 1・2 人称の再帰代名詞がなく、代名詞が代用し、3 人称の再帰代名詞はあるが、その用法は英語と異なる（詳しくは Huang2007:250-257 参照）。再帰代名詞と代名詞のふるまいが英語と異なるのはオランダ語に限らない。ヨーロッパの言語を含め、世界の諸言語が多様にふるまう。生成文法の束縛理論 (binding theory) は英語の再帰代名詞と代名詞の相補分布を前提に組み立てられているが、前提そのものが崩れている。この点については稿を改めて考察する。

§4.1, §4.2 は英語を他の諸言語と比較して気まぐれな語義拡大を考察してきた。英語固有の特徴として大きく次の 3 点を指摘できる。第 1 に、英語の語義は多義性に富み、他言語で示されるものより広い領域に用いられることが多い。第 2 に、1 語が用いられる構文が多岐にわたり、それに応じて意味が異なることが多い。例えば無生物の名詞が (35c-e) でみたように、まるで生物の名詞であるかのように無生物主語構文に用いられたり、動詞 *kick* が (27a-h) でみたように、多様な構文に用いられったりする。このような場合、英語の *open* (*see*) や *kick* の中核的意味 (または中心義) を他言語に翻訳してもあまり意義はない。例えば日本語で中核的意味をそれぞれ「開く (見る)」、「蹴る」と設定することにより、(35c-e) や (27c-e) が不可能であると連想させた場合、中核的意味の訳を与えることが、かえって害になる。重要なことは英語の語義が柔軟性に富み、他言語で示されるものより広い領域に用いられる点である。英語の語義が柔軟性に富むということは、例えば *open* という動詞は単に「(人を含む生物が) (ドアなどを) (意識的に) 開ける」というより、「(ドアなどが) 開く状態に変化し、変化させる」ことを抽象的に述べ、それぞれの構文が特定の意味に特化することになる。語義に柔軟性があるからといって、英語の文の意味が多様に解釈されるあいまいさを多くもつわけではない。ではいったい何が文や言説の中で多様な語義を特化するのかという問題がある。第 1・第 2 の特性から必然的に次の特性が導かれる。第 3 に、英語は多様な語義を特化し、語と語の関係を示すために、形式上強い制約が課せられる。形式上の制約としてラテン語にみられるような語形変化がありうる。しかし英語は歴史的に屈折語尾を消失しており、その代償として統語上厳しい制約を課している。できるだけ文脈情報や省略語法を排し、語順を固定し、厳格な主述構造をとるなど、統語型言語の特徴を固守している (統語型言語と語用論型言語の違いについては児玉 (準備中) 参照)。上記の特性をもつ英語は豊富な多義性と統語上の厳しい制約を最も徹底した言語であり、ある意味で特異な言語である。

Chomsky (1957) 後の生成文法は言語の普遍性を探るため、英語の文 (sentence) を対象に統語理論を展開してきた。ここでは文を越える言説や、語義を含む意味はほとんど考察されていないが、統語論では多くの成果が生まれている。これが可能であったのも、英語が統語型言語の特徴を多くもつためと考えられる。しかし英語は意味形式上特異な言語であり、諸言語のモデルからほど遠く、英語だけを対象とする分析から言語普遍性を期待することは不可能であろう。

人が現象や出来事のどこに視点や焦点をあてるかによって表現が違ってくる。諸言語により語義拡大の方法が異なるとしても、視点の違いの反映とみれば不思議でない。注意すべきことに、語義の拡大は無原則ではない。そうかといって語義は論理必然的に拡大し、つながっているわけでもない。ここには視点の違いだけでなく、語の屈折語尾の有無、基本語順がSVOかSOVか、動詞フレーム言語か衛星フレーム言語か、語順が固定しているか否か、話し手志向の言語か聞き手志向の言語か、統語型か語用論型かなどの言語類型も関与している。例えば語義拡大を徹底している英語は1語が多くの意味をもち、語が連なる言語表現において文脈上1語1語に意味解釈の負担を多く課し、話し手はできるだけ労少なくして、1語で多くの用事を足そうとする話し手志向の言語である。それと対照的に、日本語は1語が少ない意味をもち、語が連なる言語表現において1語1語に意味解釈の負担を少なくし、聞き手ができるだけ労少なくすむように心がける聞き手志向の言語である。こうした志向の違いは語義拡大への反映に限らない。敬語の有無、this—thatの二分法か「こ・そ・あ」の三分法かにもつながり、文全体の解釈（平叙文での陳述・予告・警告、疑問文での質問・自問・修辭疑問、命令文での命令・祈願・願望など）や文と文のつながり（接続語）を明示するか否かにも及んでいる（児玉 2008:143-144 参照）。言語類型と語義拡大の関係には多くの未解決の問題があり、将来の課題とする。

5. 辞書における語義の配列

辞書は一方では言語学の成果を取り込み、他方では利用者の便に応えようとする。利用者が辞書を参照する動機には、語の正確な意味や用法や起源、語を用いた慣用句やコロケーションを知りたいなど、さまざまなものがある。これは母語話者や外国語学習者にとっても同様である。言語学の成果や利用者の多様な動機のうち、何を重視するか、辞書の規模をどのようなものにするかによって、編集法も違ってくる。本節は編集法の中で、特に語義の配列を考察する。

時間の経過とともに語義は拡大していく。ほとんどの語は複数の意味を有しており、その意味をどの順序に並べるかが辞書編集上の問題になる。瀬戸（2005:98-99）はどの語義を初めにもってくるのかによって次の3つの方針があるという。

- (52) a. 現代的（共時的）観点から中心義を優先する。
- b. 現代的（共時的）観点から高頻度の意義を優先する。
- c. 歴史的（通時的）観点から原義を優先する。

(52a) は中心義を起点に現代の意味ネットワークである語義のつながりを記述し、(52b) は頻度順に、(52c) は歴史（年代）順序に語義を配列することになる。上記の分類自体に異論はない。

3種の辞書について順序は逆になるが、(52c) からその内容をみてみよう。(52c) の代表的なものとしては§1 でみた白川の三部作の字書がある。ここでは漢字の字形・発音・意味の起源から説き起こしている。単音節語からなる中国語には同音の字が多いため、同音であるからといって同系の字（語）であるとは限らない。白川（1996:13）は「字通の編集について」の項で字源・語源を明らかにすることによってはじめて字義（語義）の展開を明らかにすることができるかといっている。しかし語義の展開については慎重で「いちおう歴史的なものであるから、文献の使用例によって追跡しうるが、ときにその事例を欠くために、論理的に補充する必要のあることもある」と述べている。確かに歴史的展開を正確に記述することは困難である。これは長い時間が経過し資料収集が不十分とい

う技術的な面からだけではない。新しい語義が歴史的にどの地域・領域でいつ発生し、どのように一般化したのかの認定自体が困難なためである。その点、年代順による完全な語義配列は理論的にも不可能に近い。

しばしば OED (*The Oxford Dictionary* の略) は歴史主義に従ったもので語義が年代順に並べられた辞書の代表的存在とみられているが、誤解である。この誤解は OED の旧版といえるものが刊行時に *A New English Dictionary on Historical Principles* (『歴史的原則に基づく新英語辞典』略して NED) と銘打った表題から生まれている (NED は 1888 年に第 1 巻が、1928 年に最終巻が刊行されている。その後 1933 年に 10 巻の NED を 12 巻にして OED と改称。今日流布している OED は 1989 年の第 2 版で 1972 年から 1986 年までに刊行された数巻の補遺 (Supplement) を 1933 年版の本体に組み込んだものである)。OED が歴史的原則に基づく部分は各語の記述を語源から始め、語 (義) が出現した時期、古語・廃語についてはそれらが消滅した時期を明らかにし、各語義における用例を年代順に並べている点にすぎない。1 語が有する多様な語義を年代順に並べているわけではない。編者も次のように説明している。

(53) a. (本書のように) 英語の語義発達を論理的見地と歴史的見地の両方から示そうとした試みはこれまでになかった。 —Murray (1888, NEDxi)

b. 歴史的記録が完全であれば、つまりわれわれが初めから各語のすべての用法の書かれた用例をもっていれば、それを記述するだけで合理的・論理的発達を示したであろう。実際の歴史的記録はそれができるほど完全なものではないが、通例、実際の発達順序を推定できるほど十分存在する。 —NEDxxi, OED (1933) xxxi, OED (2nd Edition) xxviii-xxix

(53a) は NED の「第 1 巻の序」の中で編集長の Murray の名で書かれているが、第 1 巻だけの序であるため OED では削除されている。(53b) は「一般的説明」(General Explanation) と題して編集方針を述べたもので、署名はないが、NED から OED へ引き継がれている。(53b) も初代編集長の Murray が書いたものと想定される。ここでは語義の歴史的な発達順序が論理的な発達順序になるはずとみなしているふしがあるが、このすぐ後で語義はしばしば分岐して発展し、必ずしも一本の線で発達順序が示されるものでないことも認めている。

OED の実際の語義配列をみてみよう。OED の語義配列は現実には歴史的見地より、むしろ論理的見地から進められている。確かに多くの語では最初の語義として語源に近い古い時代の語義をあげているが、それ以後の語義配列は歴史的見地に従っているとはいえない。そのことは、初めに扱われる語義の初出例より、後で扱われる語義の初出例のほうが古いことが珍しくないことから明らかである。OED で最も大きい項目といわれる動詞 *set* の語義をみてみよう。

(54) I To cause to sit, seat; to be seated, sit (座らせる、座る)

II To sink, descend (沈む)

III To put in a definite place (配置する)

⋮

XII With adverbs in specialized senses (特殊な意味の副詞とともに)

上記のように、まず I から XII の動詞副詞結合まで 12 の意義グループに大別し、多様な語義を各意義グループの中にまとめている。語義は 1 の To place in sitting posture (着席させる) から 154 番目の *set up* まで区分し、さらに各語義を a, b, c… に下位区分し、細分された下位語義は 1000 近くにもなる。最初の意義グループ I として語源に近いものを扱い、今日では古語・廃語ともみられる語義

から始めている点に、わずかに歴史的見地をうかがうことができる。しかし各意義グループ内の語義配列はむしろ論理的見地からなされている。OEDの語義配列について詳しくは高増(2007,2008)を参照されたい。

次に(52b)の辞書をみてみよう。近年コーパス言語学が進展したことによりその成果を利用して多様な語義を頻度順に配列したものがみられる。*Longman Dictionary of Contemporary English*(略してLDCE、第3版の1995)や*Collins Cobuild English Language Dictionary*(略してCOBUILD、1987)である。2つの辞書は同音異義語も同じ見出し語のもとで扱っている。例えばbankについてLDCEは名詞で1「銀行」、2「川岸」の順に定義し、動詞は1,2で他動詞・自動詞の「預金する」、3で「(飛行機・バイク・車などが)片側に傾く」の語義をあげている。COBUILDはさらに頻度順を徹底し、名詞と動詞を一体のものとして1つの見出し語のもとで扱っている。日本でも『ウイズダム英和辞典』(2003)や『アンカーコズミカ英和辞典』(2007)などが頻度順に語義を並べている。ただし日本では同音異義語は異なる見出しとしている。また、多義的あいまい語である名詞と動詞などについては、品詞ごとに語義を説明して見出しを同じにするか、別の見出しにするかは辞書によって異なる。学習辞典は限られた紙数の中で情報を提供しようとするため。一般に共時的観点を重視する。頻度順に語義を並べた場合、現代の語義・用法が初めにあって見つけやすいという利点があるが、多様な語義が前後にばらつき、まとまりに欠けるという欠点もある。

最後に(52a)の中心義を起点に現代の語義をまとめていく方針を考察する。若干含意が異なるが、中心義は辞書によって基本義・中核的意味と呼ばれることもある。瀬戸(2007)による中心義に基づく語義配列をみてみよう。中心義は語義の出発点となり、(i)文字通りの意義であり、(ii)関連する他の意義を理解する上での前提となり、(iii)具体性(身体性)が高く、(iv)認知されやすい、など、8つの特徴を有する。中心義から直接展開する主要な語義が主意義と呼ばれ、1,2,3…で示され、さらに主意義または中心義から直接展開する語義はa, b, c…の副意義に展開する。例えばoperationは中心義が「機械を操作して働かせること」であり、この中心義からの機能類似(隠喩)で主意義の「手順に従って物事を実行すること」に展開する。さらにこの主意義から類で種を表す提喩として次の4つの副意義が生まれる。

- (55) a. とくに法的・政治的規則に従って物事を実行すること：法律・規則などの実施、施行
 b. とくに警察・軍隊などの作戦・計画を実行すること：作戦[軍事]行動
 c. とくに医学的な術式を実行すること：手術
 d. とくに数学的な処理を実行すること：演算

operationが特定の社会集団で頻用され、その意味が一般化され、(55a-d)の語義に定着しているとみなされる。しかし高増(2007)が指摘しているように、「種」がなぜこの4つの領域にのみ限定されるのかという疑問が浮かぶ。英語世界にたまたまこれを頻用する社会集団が存在したにすぎない。operationの語義拡大に必然的なつながりがあるわけではない。その結果、(55a-d)末尾の日本語の訳例がしめすように、他言語の副意義に中心義の「操作」と異なる語が与えられることにもなる。また瀬戸(2007)では中心義から隠喩で展開した副意義として「(会社・政府などの)組織を働かせること：運[経]営、営業」の語義も与えられている。この語義は(55a-d)と同じく社会的活動に言及しているのに、なぜ中心義から直接派生し、(55a-d)がなぜ主意義から提喩によって派生したのか不明確である。瀬戸(2007)は英語の大項目を対象に多義性に富む英語がどのように語義を獲得し、語義ネットワークがどのようにできあがるかを示そうとする意欲的なものである。しかし語義拡大

は気まぐれなものであり、その発展過程に論理必然性や言語普遍性が存在するわけではない。ここには中心義の設定や語義拡大の説明のむずかしさがある。

Jackendoff (2002:356-359) は語義を把握する際の抽象化が言語理論により異なることに言及している。

- (56) a. The messenger went from Paris to Istanbul. [Change of location]
 b. The inheritance finally went to Fred. [Change of possession]

(57) a. 概念意味論

(56a) の to = 空間の TO

(56b) の to = 所有の TO

TO は経路機能を示し、領域については中立で文脈に応じて領域を指定する。

b. 認知言語学

(56a) の to = TO

(56b) の to = 所有の F (TO)

TO は空間の経路スキーマであり、F は空間イメージの領域を所有イメージの領域に写像転用する機能である。

(56a, b) の to を説明する際、概念意味論は抽象的な「経路」を示す語義の TO を設定し、それが文脈に応じて場所変化 (56a) や所有変化 (56b) を表す。一方、認知言語学によると、to はもともと (56a) のように「空間の経路」を表し、(56b) では隠喩により所有に転用されたものとなる。概念意味論は抽象的な基本義を仮定し、認知言語学は具体性が高く認知されやすい空間 (身体) 上の中心義を出発点にしている。確かに語義拡大の説明は言語理論によりこの2つに大別され、Jackendoff は (57a) に従い、瀬戸は (57b) に従っている。しかし瀬戸 (2007) には時に中心義の規定からずれたものも見出される。赤野 (2008) が指摘しているように、qualify, station などの中心義は、適用範囲を広くしようとするあまり、抽象度の高い基本義とも呼べるものになっている。私自身、そのことを批判するつもりは全くない。むしろ記述に一貫性を求めようとして、(57a) か (57b) の一方に固執することのほうが実態に合わない。語義拡大が気まぐれに進むとすれば、個人の語義習得は (57a, b) の一方に片寄るものとはいえない。むしろ両方を混在させて語義を習得しているのが実態であろう。ここには言語理論と実態との間に乖離があり、言語理論がまだ実態に追いついていない。

語義が気まぐれに拡大するとみた場合、(53a) の Murray (1888) の主張もそのまま受け入れることはできない。歴史的見地と論理的見地の両方から語義配列を進めるといふときの「論理的見地」とは論理一貫性というより「意味上のつながり」とでも解釈すべきである。まして (53b) のように、語義の歴史的発達順序が論理的発達順序になるはずはない。言語理論において例えば英語の助動詞について1つの中核の意味が文脈に応じて多義に拡大するとみるべきか、初めから複数の領域に基本となる語義を仮定すべきかがしばしば議論される。前者が単義説、後者が多義説と呼ばれるが、実態において両者が主張するような決定的な違いがあるとは考えられない。むしろ語義の生成理解においては、単義説や多義説が主張するような認識過程が混在しているのではなかろうか。

語義拡大に論理必然的な一貫性がないとすれば、中心義や基本義は、そのような留保条件をつけた上で個別言語の意味上のつながりを示唆するものにすぎない。辞書によっては意味ネットワークまたはプロフィールと称して中心義や基本義から派生した語義を鳥瞰するものもある。しかしこの

鳥瞰図も山や田園の全体像が場所により異なるように、ある語義がそのまま他の語や他言語の語義発達に適用できるわけではない。§4.1の初めでも述べたように、airの「空気、外見、曲;空気にあてる…」、springの「春、ばね、泉;はねる…」などの語義間にどれほどのつながりがあるのだろうか。語によっては中心義を見出しにくいものもある。また§4.2の末尾で述べたように、英語の中核的意味を他言語に翻訳することは、諸言語に含意の違いがあり、かえって害になることもある。特に学習辞典においては紙数が限られているため、中心義や基本義などは編者が想定しているほど学習効果をあげているかどうか疑わしい。これは、語義が気まぐれに展開していることを知った現在、自戒の弁でもある。私自身、監修協力として『ニュー・アンカー英和辞典』(1988)の大項目語で基本義を担当し、監修者の一員として『スーパー・アンカー英和辞典』(1997)でプロフィールを担当してきた。学習辞典として基本義やプロフィールを参照させるより他のより重要な情報を提供するほうがよいのかもしれない。学習辞典としては頻度の高い語義は太字で示すことで解決される。語義間のつながりを詳しく解説して学習者の便に供するべきか、それとも意味上バラバラに並ぶかもしれない太字の語義から語義の全体像を自然に把握させるのが学習者にとってプラスになるのかというやっかいな問題に直面する。手取り足取り詳しく説明しさえすればよいという問題ではない。学習者の言語学習能力をどのように考えるか、教育をどのように考えるかの問題でもある。

6. 語義・発話の生成理解：言語知識と言語活動と知覚

生成文法もD構造やS構造を表示していた1990年代初め頃までは統語論と意味論が任務分担されて意味と形式の結合関係がうかがえた。この間、Chomskyが次々と変えていく統語理論に合わせて意味論も変わっていった。変形文法と呼ばれた時代のKatz and Postal(1964)、1970年前後の生成意味論と解釈意味論の論争、1970年代のXバー理論、1980年代の統率束縛理論時代の原理とパラミターによる意味分析である。しかしその後のミニマリスト・プログラムでは形式と意味の関係が不明である。ミニマリスト・プログラムは経済性を徹底している。語彙目録(lexicon)からの情報をもとに、最小限の併合(merge)と移動(move)の規則からなり、その演算過程のある段階で音声にかかわる情報のみがPFに、意味にかかわる情報がLFに送られる。この過程で語彙目録での語彙情報およびLFに送り込まれる意味情報がどのようなものであるのか、詳細が不明である。意味論においても同様である。今日JackendoffやPustejovskyなどが語彙意味論を独自に展開しているが、その意味分析をミニマリスト・プログラムにどのように組み込むかについては一切言及していない。生成文法は統語論が主であり、意味論は従で統語論の解釈的なものにすぎないという観が強く、両者はますます分離している。

時の経過の中で異なる形式が同じ形式に合体したり、新しい概念を表示するために同じ形式が新しい用法や意味を獲得した結果、1つの形式に多様な意味が込められてきた。日常の言語活動では形式と意味が一体のものとして生成理解されており、言語理論は実態を説明できるものでなければならない。本論は語義の多義性を含みあいまいさを論じてきたが、最大の疑問は多義であいまいな拡大語義をなぜ瞬時に生成理解できるのかということである。これまでみたように、勝手気ままに拡大する意味を含む語も、関連した語句と共起する文脈の中で特定の語義が選ばれ、意味用法についての(不)適格性の判断が瞬時になされている。ここでは現実世界についての知識、比喩、クオリア構造、意味役割、文法知識などが渾然一体となって言語活動を支えている。時間軸にそって線条

的に流れる言語表現が瞬時に生成理解されるということは、言語活動を支えている各要素の多様な情報が、まるでカメラが被写体を写しとるように、瞬時に合体して言語表現の生成理解に寄与していることになる。発話を生成理解する過程では小泉(2007:177)のいう構造系列から線条系列への切り替えが進行している。両者を結びつけるものが、無意識的に習得されている言語知識である(言語知識について詳しくは児玉2008:54参照)。線条系列では発話の処理、つまり意味解釈がすばやく効率よく行なわれるだけに、構造系列のすべての情報が復元されるとは限らない。例えば構造系列上、多義であいまいな意味を有する文に対して、聞き手が線条系列で特定の意味のみに解釈して他方の意味を無視し、コミュニケーションに齟齬が生じることもありうる。

発話の生成理解の過程は非言語的な知覚や認知と似ている。多くの場合、ともにあいまいで不十分な情報から、外部で起こっている出来事について推断(heuristic)する。推断は数学や論理学での解法ではなく、直感的判断で人々が暗黙のうちに用いる簡便な解法のことである(詳しくは下條1999:59、児玉2008:93-96参照)。人は常に十分な証拠や完全な論理をもっているわけではなく、推断を駆使して意図や行動を決定している。もちろん推断の直感的判断において「錯覚」を犯す場合もある。月の出直後の月が大きく見え、まっすぐな棒も水中では曲がって見える。太陽は昇ったり沈んだりするのか、それとも地球のほうが自転しているのか。錯誤か正しい知覚かの区別が困難な場合もある。言語活動においても同様である。新幹線などで上り行きの乗客は「自分が東京へ近づいている」とも、動かないはずの「東京が近づいている」とも知覚したり、表現したりする。また「試合に負けたら坊主になる」と言っていた次郎が坊主になった姿を見て、太郎は「次郎は試合に負けたのだな」と推断する、しかし実際に次郎が坊主になったのは何か別の理由によるのかもしれない。真実がわかった段階で推断は修正される。

推断を支えているものは経験により蓄積された知識や推論による演算体系である。先日、私は20年間連絡のなかった旧友から突然電話を受けた。特別に変わった声の持ち主でもないその旧友が名乗る前に私のほうから相手の名前を告げることができた。我ながら記憶というものの不思議さに驚いた。泳いだり自転車に乗るコツをいったん身につけると、何年経ってもそのコツを忘れないことと似ている。五感による知覚・認知や運動感覚の習得と同じことが言語知識にもいえる。つまり言語知識の獲得には、経験を介して多様な意味の違いを峻別し、長期に記憶する力が働いている。あるテレビ番組で山極寿一京大教授がアフリカで昔なじみのゴリラに26年ぶりに再会し、ゴリラが教授を覚えていた映像を見た(2009年3月26日NHK番組(午後7:30-8:45)「ゴリラ先生ルワンダの森に行く」参照)。高度の記憶力は人間だけでなく動物に共通する能力であろう。

従来、言語学では人間に生得的な言語能力が埋め込まれているとして、子供は経験によらないものも習得していることが強調された。例えば子供は大人からいちいち教えてもらわなくても複雑であいまいな文を理解でき、実際に使われない文とそうでない文を区別できるという証拠欠如の問題や、子供はどこに生まれてもその社会の言語を習得できると言う汎言語能力の問題などである(詳しくは児玉2006:27-28参照)。確かに言語能力にはこのような言語普遍的な特徴がある。生成文法が普遍文法の構築を言語学の最大の目的に掲げるのもこのためである。しかし人間には上記で見たような高度の記憶力が備わっていることも忘れてはならない。勝手気ままに拡大する語義を含め、個別情報からなる語彙目録が言語活動の基礎にある。ここでの語彙目録は生成文法が想定しているものと違って、言語活動を可能にする非言語的情報を含んでいる。言語知識は抽象的な言語構造の知識だけでなく、高度の記憶力により蓄積された語彙目録の情報からなる(記憶とことばの文献紹介について

は清水 2009 参照)。諸言語間で多様に拡大する語義を高度の記憶力により蓄積することは、あるいは (44) – (51) でみたように文法規則が諸言語間で多様に異なることは、生後の経験を通じて現実の言語使用を基礎に言語を学習しているともみなされる。このことは直接、言語の普遍性や生得性を否定するものではない。普遍性や生得性は、第 1 に経験により何が獲得されるか、その範囲や領域を示し、第 2 に経験によりどのように獲得されるかの原理や過程を示唆するものである。第 2 の点について普遍性や生得性の特性は生後の条件を超越して学習原理や学習過程を支配するものではなく、従来考えられていたほど絶対的なものでない。語義や文法規則の蓄積は単に言語普遍性や生得性で習得されるものではなく、経験を通じて学習されるものでもある。言語学の目的は、習得・学習される言語知識を明らかにすることである。その目的を達成するためには、構造系列だけでなく線条系列での言語知識も対象にする必要がある。

言語活動の背後にある言語知識は現実世界についての知識ともかかわり、知識は多様な階層からなる。多様な階層は入り乱れており、一切を説明できる原理や法則が存在するわけではない。文型を形成する構文や語から言説に至る領域が違えば原理や法則も違ってくる。原理や法則の違いは、諸言語間だけでなく、同一言語内にもみられる。まず異なる構文での違いからみてみよう。(35) (47a) の主語選択階層や (36) の形容詞の適用範囲において英語は、日本語や他の印欧語に比べて、生物・無生物の区別に厳しくないことを述べた。しかし英語は二重目的語構文においては生物・無生物の区別が厳しく適用される。

(58) a. The shortstop threw the first baseman [*the fence] a ball. vs The shortstop threw a ball to the first baseman [the fence].

b. 遊撃手は一塁手 [フェンス] にボールを投げた。

(59) a. John sent his friend [*London] a parcel. vs John sent a parcel to his friend [London].

b. ジョンは友人 [ロンドン] に小包を送った。

(58) (59) の英語では無生物の間接目的語は不適格であり、それに対応する日本語が適格であるのと対照的である。要するに、主語選択階層と二重目的語構文において英語と日本語はそれぞれ生物・無生物の区別に逆の反応を示している。

次に異なる領域での原理や法則の異同をみてみよう。例えば日本の言説は児玉 (2008) が指摘しているように、あいまいさを特徴としている。この言説の秩序は日本文化ともつながり、依言真如より離言真如を尊び、ことばを超えたところにこそ真実があるという世界観さえつくってきた。離言真如の世界は、物事の境界を不鮮明にして全体性を求めるものであり、自他一如 (じたいちじょ)、主客未分化の世界でもある。このような日本古来の思想はヨーロッパの思想との間に大きな隔りがある。しかしこうした言説の秩序や文化のあり方もどの領域を捉えて論ずるかによって違ってくる。例えば文の中心となる動詞は日本語では自動詞と他動詞が形態上区別され、主語になりうるものと客体の目的語になるものが動詞によって明示されている。これと対照的に英語の動詞の多くは自動詞にも他動詞にも用いられ、自他一体であり、主客未分化ともいえる。自と他、有と無、生と死、これらは互いに対立しているが、前者のみが価値をもつのか、それとも自然という全体性の一面である現象・場面・領域の違いにすぎないのか。諸言語や諸文化は上部領域や下部領域が入り乱れながら形成されている。異なるレベルでは類似の現象もみられるが、全体的には大きな違いが存在する。その違いの原因を知るためには、交錯している諸特徴の相互関係を明らかにすることが今や最大の課題かもしれない。

多重階層からなる言語表現の意味は、一方では部分を構成する小さい単位の意味がボトム・アップ的に組み立てられ、他方では全体の文化、話し手の意図や価値観、文脈がトップ・ダウン式に意味に影響を与えている。全体の意味と部分の意味は相互に規制し合い、互いの意味を変えていく。全体と部分のうちいずれの支配がどの領域に及ぶかは言語や文化によって異なる。言語学としてはボトム・アップ的分析とトップ・ダウン的分析をいかに統合するかが課題となる。

本論は語が表す意味の歴史的変化、語義の拡大、あいまいな語義の生成理解の仕組みやその判別法、諸言語における語義拡大の異同、辞書における語義記載のあり方、発話の生成過程などを考察した。要するに、言語活動を支える言語知識がどのように蓄積されるかを論じ、最後に言語学のあり方に提言した。語彙目録に記載される情報は、個別的で体系性に乏しく、多義であいまいな語義も含むが、文・言説・文化という文脈の中で特定の意味や意図に特化される。言語活動を支える言語知識は、人間の生得的な言語能力と経験の中で蓄積される多様な知識、さらには習得したものについての高度な記憶力からなる。言語活動の全体像に接近するためにはこの言語知識を明らかにする必要がある。言語の生成理解の演算過程においては、従来等閑視されてきた記憶力や現実世界の非言語的知識にそれ相応の役割を与えることも重要な課題といえよう。

引用文献

- 赤野一郎. 2008. 「瀬戸賢一編『英語多義ネットワーク辞典』」(書評)『英文学研究』85:262-267.
- Asher, N, and A. Lascarides. 1996. 'Lexical disambiguation in a discourse context.' In Pustejovsky and Boguraev 1996:69-108.
- Benedict, R. 1946. *The Chrysanthemum and the Sword—Patterns of Japanese Culture*. Boston: Houghton Muffin Co. (長谷川松治訳 (1967)『菊と刀——日本文化の型——』東京: 社会思想社)
- Chierchia, G. and S. McConnell-Ginet. 2000. *Meaning and Grammar: An Introduction to Semantics* (2nd Edition). Cambridge (MA): MIT Press.
- Chomsky, N. 1957. *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.
- Copestake, A. and T. Briscoe. 1996. 'Semi-productive polysemy and sense extension.' In Pustejovsky and Boguraev 1996:15-67.
- Cornish, F. 2007. 'Implicit internal arguments, event structure, predication and anaphoric reference.' In N.Hedberg and R.Zacharski (eds.) *The Grammar-Pragmatics Interface*, 189-216. Amsterdam: John Benjamins.
- Cruse, D.A. 1986. *Lexical Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cruse, D.A. 2003. 'The lexicon.' In M. Aronoff and J.Rees-Miller (eds.) *The Handbook of Linguistics*, 238-264. Oxford: Blackwell.
- Cruse, D.A. 2004. *Meaning in Language: An Introduction to Semantics and Pragmatics* (2nd Edition). Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, A.E. 2001. 'Patient arguments of causative verbs can be omitted: the role of information structure in argument distribution.' *Language Science* 23:503-524.
- Green, G.M. 1974. *Semantics and Syntactic Regularity*. Bloomington: Indiana University Press.
- Green, G.M. 1996. *Pragmatics and Natural Language Understanding* (2nd Edition). Hillsdale (NJ): Lawrence Erlbaum Associates.
- 本多 啓. 2005. 『アフォーダンスの認知意味論——生態心理学から見た文法現象』東京: 東京大学出版会.
- Huang, Y. 2007. *Pragmatics*. Oxford: Oxford University Press.
- Huddleston, R. and G.K.Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Jackendoff, R. 2002. *Foundations of Language: Brain, Meaning, Grammar, Evolution*. Oxford: Oxford University Press.
- Jaszczolt, K.M. 2002. *Semantics and Pragmatics: Meaning in Language and Discourse*. London: Longman.
- Jaynes, J. 1976. *The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind*. (柴田裕之訳 (2005) 『神々の沈黙：意識の誕生と文明の興亡』東京：紀伊国屋書店)
- Katz, J.J. and P.M. Postal. 1964. *An Integrated Theory of Linguistic Descriptions*. Cambridge (MA) :MIT.
- 児玉徳美. 1987. 『語順の普遍性』京都：山口書店.
- 児玉徳美. 1991. 『言語のしくみ——意味と形の統合——』東京：大修館書店.
- 児玉徳美. 2002. 『意味論の対象と方法』東京：くろしお出版.
- 児玉徳美. 2006. 『ヒト・ことば・社会』東京：開拓社.
- 児玉徳美. 2008. 『ことばと論理——このままでいいのか言語分析——』東京：開拓社.
- 児玉徳美. (準備中) 「言語理論のあり方——Huang (2000, 2007) が問うもの」
- 小泉 保. 2007. 『日本語の格と文型——結合価理論にもとづく新提案』東京：大修館書店.
- Lyons, J. 1977a. *Semantics I*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lyons, J. 1977b. *Semantics II*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 三好助三郎. 1977. 『新独英比較文法』東京：郁文堂.
- 村上春樹. 2009. 「僕がなぜエルサレムに行ったか——独占インタビュー&受賞スピーチ」『文藝春秋』(4月号) 156-169.
- Murray, J.A.H. 1888. 'Preface to Volume I.' NED v-xiv.
- Palmer, F.R. 1981. *Semantics* (2nd Edition). Cambridge: Cambridge University Press.
- Pustejovsky, J. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge (MA) :MIT Press.
- Pustejovsky, J. and B. Boguraev (eds.). 1996. *Lexical Semantics: The Problem of Polysemy*. Oxford: Oxford University Press.
- Pustejovsky, J. and P. Bouillon. 1996. 'Aspectual coercion and logical polysemy.' In Pustejovsky and Boguraev 1996:133-162.
- Russel, B. 1923. 'Vagueness.' *Australian Journal of Philosophy and Psychology* 1:84-92. Also reprinted in B.Aarts, D.Denison, E.Keizer and G.Popova (eds.) 2004 *Fuzzy Grammar: A Reader*, 35-40, Oxford: Oxford University Press.
- Saeed, J.I. 1997. *Semantics*. Oxford: Blackwell.
- Schroten, J. 2000. 'Equivalence and mismatch of semantic collocation in English, Spanish and Dutch.' In S.Niemeier and R.Dirven (eds.), *Evidence for Linguistic Relativity*, 29-51. Amsterdam: John Benjamins.
- 瀬戸賢一. 2005. 『よくわかる比喩——ことばの根っこをもっと知ろう』東京：研究社.
- 瀬戸賢一 (編). 2007. 『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館.
- 清水寛之. 2009. 「記憶とことば」『言語』(5月号) 52-55.
- 下條信輔. 1999. 『<意識>とは何だろうか 脳の来歴、知覚の錯覚』(講談社新書) 東京：講談社.
- 白川 静. 1984. 『字統』東京：平凡社.
- 白川 静. 1987. 『字訓』東京：平凡社.
- 白川 静. 1996. 『字通』東京：平凡社.
- 白川 静. 2002. 『漢字百話』(中公文庫) 東京：中央公論新社.
- 高増名代. 2007. 「辞書編纂における意義配列について——OEDと『英語多義ネットワーク辞典』を中心に」『大阪千代田短期大学紀要』36:1-25.
- 高増名代. 2008. 「OEDにおける意義配列——James Murray はなぜ論理的順序を採用したのか?——」『六甲英語学研究』11:17-31.
- 高見健一. 2009. 「cause 使役文とその受身文」『英語青年』(3月号) 709-712.
- Wierzbicka, A. 1996. *Semantics*. Oxford: Oxford University Press.

安井 稔 . 1978. 『言外の意味』 東京 : 研究社 .

Zwicky, A. and M.Sadock. 1975. 'Ambiguity tests and how to fail them.' In J.Kimball (ed.) *Syntax and Semantics Vol 4* :1-36. New York: Academic Press.

(本学名誉教授)